



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について：歴史的背景を中心に
Author(s)	加藤, 克
Citation	北大植物園研究紀要, 8, 35-91
Issue Date	2008-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34668
Type	departmental bulletin paper
File Information	35-91.pdf



北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について

- 歴史的背景を中心に -

加藤 克¹

はじめに

北海道大学植物園（以下、北大植物園・博物館と略記する）¹に所蔵されているアイヌ民族資料の総数は2,500点を優に超え、日本国内のみならず世界的にみても大きなコレクションの一つである。また、その資料点数だけではなく、1877(明治10)年に設立された開拓使札幌博覧場以来の収集資料という由来から、明治時代初期のアイヌ文化の様相を把握する上で欠くことのできない証拠資料群であること、および1930-40年代に活躍した名取武光を中心としたアイヌ文化研究者らによる研究活動の証拠資料からなる資料群であることの2点から、日本国内に所蔵されている資料において欠落することの多い収集情報等が付属する、良質な研究資源として認識されている。これらは、従来も多くの研究者の利用に供されてきたが、今回統一された形での悉皆調査が実施され、その成果が目録として公開されることになった。これにより、研究や博物館等における展示利用が促進され、アイヌ文化研究や文化振興、普及に貢献することが期待される。

しかしながら、このコレクションには利用に際して留意しなければならない点がある。今回作成された目録(北海道大学植物園2008)を一見すれば明らかなように、収集年代情報が付随する資料は、比較的多いという評価は得ているものの2割程度にしかすぎない。目録の基礎となっている北大植物園・博物館の資料管理台帳は、所蔵するアイヌ民族資料のほぼすべてが収集された後の1961(昭和36)年ごろに新規に運用され始めたものであり、管理番号の若さが収集年代の古さを示すものとはなっておらず、管理番号による収集年代の把握ができない以上、情報が付随しない資料は1877年の博物館設置から1960年代初頭に至るほぼ1世紀のいずれの時期に収集されたものであるか明確にすることができないのである²。後述するように、北大植物園・博物館のアイヌ民族資料の大部分は、1870-80年代と、1930-40年代の二つの時期に集中して集められたものである。このおよそ半世紀の間に、収集対象となったアイヌ文化は強制的に変質されており、収集された資料もその影響を受けているものと考えられる。同時に、収集する側の立場や収集目的・経緯、アイヌ民族への視点、考え方も時代の変化を受けて大きく異なっており、収集された資料にもその影響が表れている可能性が高い。しかし、北大植物園・博物館所蔵資料は、情報の不足・欠落もあり、これまで収集年代や収集者ごとの資料群としての管理を行うことなく一括したアイヌ民族資料として取り扱われ、個々の資料がどのような歴史的背景を持つものであるのかについてまとめられたことはない。つまり、大部分の資料が、収集背景情報が整備されていない資料であり、研究資源として適切なものとはいえない状況にあるのである。

北大植物園・博物館所蔵資料がどのような時代背景の下で収集されてきたかについては、沖野が収集・管理に携わった関係者を主たる検討課題として論じている(沖野1999,2000a,2001)が、そこで引用された資料は収集年代の判明しているものがほとんどであり、ここで問題としている収集年代の明らかではない資料が、沖野の論じたそれぞれの時代背景のいずれに属するものであるのかについては、明らかにはされていない。一方、沖野の報告ののち、北大植物園・博物館では過去の民族資料管理記録が新たに確認された。筆者はそれらを利用して、明治時代に収集・管理されていた資料の全体像について検討を行い、いくつかの収集年代の欠落した資料について明治時代の収集資料であることを明らかにした(加藤2004)。しかし、1930年代以降の収集資料を含む資料群全体の検討には至っていないこと、また、外部機関との資料交換などについての関連史料の調査が不十分であり、修正を要する部分が多々あるなどの問題を抱えている。

¹北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

以上の問題点から、北大植物園・博物館所蔵のアイヌ民族資料を研究資源として利用する場合には、その目的に応じて資料の持つ歴史的背景などについて個別に検証する必要がある。しかしながら、沖野にせよ筆者にせよ、資料管理者としての立場においてすら全容を把握しかねるほどの資料点数と、博物館の歴史の長さ、複雑さを鑑みるならば、外部の利用者にその検証をすべて求めることは困難であろう。そこで、本報告では、今後の利用の便を図ることを目的として、以下の構成をとることとしたい。まず、博物館の開設以来の歴史と、その中でアイヌ民族資料がどのような意図をもって収集されてきたのかについての歴的変遷を整理し、資料群全体として有する歴史的情報を提示する。次に、個々の資料が上記変遷のいずれの時期に収集・受入れられたものであるのかを把握するために、博物館の歴史の中で行われてきた資料管理や受入れなどの情報について、従来断片的にしか紹介されてこなかった史料や新たに確認された史料を整理しつつ紹介し、資料のおおよその収集年代を把握するための情報を提供する。以上の二側面からの整理によって、個々の資料の持つ歴史的背景情報の復元の一助としたい。

1 北大植物園・博物館の歴史とアイヌ民族資料の位置付けの変遷

ここでは、北大植物園・博物館の設立から現在に至るまでの歴史について、大きな変化ごとに概観し、その期間において博物館がどのような意図をもって、アイヌ民族資料を収集していたのかについて検討を行う。

1-1 開拓使による博物館設置から札幌農学校移管まで³

〔札幌博物場開設前史〕

北海道における博物館の誕生には、1871年に開拓使が事業推進のために頭取・顧問として招聘した、アメリカ農務局長 H. ケプロンによる提言が大きな影響を与えたとされる。ケプロンは「教導ノ道ヲ開クニハ文房（ライブラリー）及ヒ博物院（ミセーム）ハ缺クヘカラザル事ハ當然ナリ⁴」とし、国内の地質・動植物資料を収集し、それを諸外国と交換することで効率的に「教導ノ道ヲ開ク」ことができると提言している。ここには、北海道開拓の推進のために、西洋農業技術の導入とともに、自然科学の知識の普及が欠かせないものであるという認識があったものと考えられるが、開拓使がこの提言にどのように対応したのかについては不明である。

ケプロンの提言の翌年に、明治政府から各府県に対してウィーン万国博覧会に出品する資料収集についての指示が出され、開拓使は、北海道物産取調掛を置き対応することとした。同年4月に北海道物産取調掛が提出した「澳国博覧会ニ供スル北海道物産取調方之綱領⁵」という伺いにおいて、「其形之儘永保可仕」分については、「一品モ御使博覧物局ニ取収メ、今日ヲ基立ニテ追々広御取集メ、他日博覧之用ハ勿論、北海全島開化之進歩ヲモ御証明可被成事」とあることから、取調掛の収集はウィーン万博への出品にとどまらず、開拓使が設置を意図している「博覧物局」に保存し、今後の万国博覧会などへの出品への「基礎」とすることを念頭に置いていたようである。また、ここには収集した資料を通じて「北海全島開化之進歩ヲモ御証明」という「開拓使がその後展開していく博物館・博覧会政策の柱の1つとなる考えが現れている」と三浦(2001)は評価している。

1873年6月に開拓使は札幌本庁物産局内に博物課を設置した。この博物課の分掌事項は「物品ヲ採蒐シ、博覧ニ供スルヲ掌ル」こと、「凡物品ハ其種類ヲ分チ名称ヲ明ニシ出産ノ地発見ノ時ヲ記シ之ヲ産物明細録ニ編ム」こと、「物品ハ常ニ之ヲ展列シテ博覧ニ供シ或ハ博覧會ニ送り之ヲ展覧雜記ニ編ム」こと、「採蒐スル所ノ物品ハ毎歳之ヲ統計シテ産物捷覧表ヲ作ル⁶」ことと定められた。ウィーン万博以降の万国博覧会や、国内で開催される勸業博覧会などへの出品を念頭に置いた、北海道の物産収集を主体的に進める組織の整備である。この時点では、恒常的な展示施設を有する機関の設置には至っていないものの、情報管理が伴った資料収集、公開の準備態勢が整い、開拓使による博物館施設設置への動きと評価できる。この流れの中で、1875年6月に東京芝山内にあった開拓使東京出張所内に、「北海道ノ物産及開拓ノ参考ニ供スヘキ内外ノ物品ヲ展列シ衆庶ニ縦覧セシム⁷」ことを目的とした北海道物産縦観所が設置された。翌年2月には東京仮博物場と改称され、ケプロンの意図した「博物院」がここに誕生したのである。この博物場は、「全道之物産」が「富饒」であるという知識の普及、北海道移住の勧誘という役割を担うことを目的に設置されたものであり、同時に開拓事業の進捗状況や成果を広く宣伝する役割も有していたとされる。この役割

の延長として、各地方で開催された地方博覧会への出品窓口としての機能も果たしていた(三浦 2000)。東京仮博物館は1881年の東京出張所閉鎖に伴い閉場され、「陳列物品ハ札幌本庁及函館支庁へ移シ或ハ上野公園地内博物館ニ付与⁸⁾」されることとなった。以上が、北大植物園・博物館の設立に至る前史の概要である。

〔札幌仮博物館開設から札幌農学校移管まで〕

1877年、開拓使札幌本庁は札幌偕楽園内に札幌仮博物館を設置した。設立の目的は、東京仮博物館のそれと共通しており、「専ラ北海全道ノ物品ヲ蒐集シ此ニ展覧シテ衆庶ノ縦覧ヲ許⁹⁾」し、「博覧會一切ノ事務¹⁰⁾」を担うものとされた。「年ヲ追テ物品増加シ場所狹隘展列ノ余地ナキヲ以テ、明治十三年博物館新築ノ義ヲ稟請シ而シテ裁可ヲ得テ同十四年ニ至リ起業、同十五年六月功ヲ竣ヘリ¹¹⁾」とあるように、この博物館では収集資料が増加し、新たな博物館施設である札幌博物館が1882年6月に建設されることになる。しかしながら、札幌博物館が竣工する直前の2月に開拓使は廃止され、札幌博物館は農商務省に引き継がれることとなった。同年8月に引継事務が完了し、農商務省博物局の所管となった札幌博物館は、次いで翌83年3月に農商務省北海道事業管理局に所管が変更となった。

開拓使の札幌仮博物館から、農商務省の札幌博物館となったことによる変化は、1882年12月に博物局から農商務卿宛に提出された「札幌博物館ノ義ニ付伺¹²⁾」にある以下の方針が、仮博物館時代の活動の様子と比べて大きな相違がないと評価されることから、従来それほど大きなものとはみなされてはこなかった。

札幌博物館ハ北海道所産ノ動植物及ヒ之ニヨツテ製出スル工芸品ヲ蒐集スルコト

又開拓殖民ノ為メ裨益アル物品即農業漁業山林ノ諸産物及ヒ其製品并供用物品及器具等ヲ陳列シ陸水二産増殖ノ模範タラシムルコト

全道土人ノ曾テ使用シタルモノ及ヒ現今所用ノ物品ヲ蒐集シテ史伝ノ考徴ニ供スルコト

しかし、所管が変わることによって生じた博物館の活動の相違は従来言われてきたような小幅なものではない。農商務省の所管となって以降、札幌博物館の性格がどのように変化したのかについては、1883年9月の場長補仁田登の「当場ノ目的ハ公衆ニ縦覧セシムルニアリ。現今ノ建物ハ開拓使ノ造営ニシテ竣工ニ及ブ頃引継ヲ受ケシモノ也。其以前ハ列品僅少、屋宇モ殆ト頽廢シテ甚不整頓ナリシカ、昨年博物局長田中芳男君來場アリテ其実況ヲ目撃シ更ニ区画ヲ〇フシ、又人民ノ縦覧ヲ許スヘシトノ説ニヨリ方今ノ姿ヲナセルモノ也¹³⁾」という発言に表れている。農商務省博物局の田中芳男の指示に従って、資料管理のあり方に改善が加えられ、さらに「公衆ニ縦覧」させることを目的とするという、それ以前とは異なる認識が生まれたのである。札幌仮博物館の設置目的にも「展覧シテ衆庶ノ縦覧ヲ許⁹⁾」すという記述があるが、おそらく札幌仮博物館時代は、施設規模が小さく、職員数が少なかったこともあり、公開よりも開拓使の行政機関としての業務が優先される状況にあったものと推測される。この展示公開の重視という流れが札幌博物館における変化の一つといえよう。同時に、その展示のありかたにも変化が生じたものと考えられる。後の史料ではあるが、「(明治)十五年七月開拓使ヨリ農商務省博物局ノ所管ニ移サレテ札幌博物館ト称シ、物品陳列ノ目的ヲ更ヘ、専ラ拓殖上ニ裨益スル勸業方面ノ物品ト其製品ニ用キラルル器具類トヲ陳列スルコトトセリ¹⁴⁾」とあるように、札幌博物館は「開拓殖民、勸業に資することを最も重視(関 1991)」する博物館へと様変わりしたものと考えられる。「当場将来ノ目的ハ列品ヲ大別シテ天産、史傳、勸業ノ三大部ト為スニアリ。今ヤ天産、史傳ノ兩部ハ粗体裁ヲ為ト雖モ最も要用ナル勸業ハ未タ整頓セス、依テ農漁山林ノ諸産物及器具、製品等ヲ陳列シ、陸水二産増殖ノ模範タラシメントスルニアリ」とする「札幌博物館 将来ノ目的¹⁵⁾」にもみるように、農商務省の管轄に入って天産・史伝・勸業の三部に整備された体制の中で、勸業部の充実がこの時期の主たる関心であり、充実していた動物関係の資料や、史伝部として位置づけられた古器物、アイヌ民族資料などへの関心が薄らいだものと考えられる¹⁶⁾。

以上のように、勸業博物館的要素の強い農商務省時代の札幌博物館は、「専ラ北海全道ノ物品ヲ蒐集」していた札幌仮博物館とは異なる意図に基づいて活動していたと考えるべきである。

この札幌博物館は、1884年7月に札幌農学校への移管が決定し、同年8月に引継が完了する。これをもって、北海道大学の組織としての札幌農学校所属博物館、現在の北大植物園・博物館の歴史が始まることとなる。

なお、ここで、開拓使のもう一つの博物場、函館の博物場についても触れておきたい。函館では、1872年7月にウィーン万博に出品するために収集された資料を利用して展覧会が開催されている。その後、1878年に函館公園修築事業の一環として博物場の設置が計画され、翌年5月25日に函館仮博物場が開場することとなる。設置の目的としては、「本使管内ヨリ産出スル物産ヲ第壹トシ御国内自然ノ物産ト人工製造諸物トヲ収集シ一般人民ノ縦覧ニ供セハ即チ開拓ノ進歩ヲ補助シ人民ノ智識ヲ開達シ、或ハ中外博覧會ノ挙アルニ際シ出品ノ順序ヲ整調スルノ便ヲ得ベク、加之本使製造物品ノ見本ヲ陳列シ、内外人民購求ノ道ヲ得セシメ度、且ツ当港ノ如キ内外人民輻湊ノ地ニ於ハ自然要用ノモノト存候¹⁷⁾」とあるように、東京仮博物場や札幌仮博物場と同様に、北海道産の資料を主に収集し、開拓進歩を周知させるための展示、博覧会への出品業務を効率的に行うための施設であった。ただし、開港場としての特徴から、訪問・滞在する外国人に対しての公開施設としての機能も念頭にあったようである。

函館仮博物場は、1882年の開拓使廃止後、函館県に移管され（函館博物場）、のち北海道庁、函館区、庁立函館商業学校、函館中学校へと所管が変更され、所蔵資料の管理も適切には行えない状況となり分散したものも少なからずあるようであるが、現在は市立函館博物館として資料管理・活動が行われている。

1-2 農学校移管以前におけるアイヌ民族資料の収集意図・位置付け

前節では、現在の北大植物園・博物館が、札幌農学校に移管されるまでの大まかな歴史を確認した。開拓使時代の5年と農商務省時代の2年、あわせて7年ほどの間ではあるが、2章で確認するように、この時期に相当数のアイヌ民族資料が収集されていること、同時に上記のように、開拓使から農商務省に所管が変わったことによってアイヌ民族資料の位置付けや収集意図も変化したものと推測される。ここでは、当該時期におけるアイヌ民族資料の収集意図や位置付けについて検討することとしたい。

〔開拓使の資料収集意図〕

札幌仮博物場が設立された1877年以前に開拓使が収集した資料のうち、ウィーン万博に出品する目的で収集されたものは博覧会後、ベルリン民族学博物館に収蔵されており（クライナー 1987）、国内に残ったものについては博覧会事務局から引き継がれ、現在は東京国立博物館に所蔵されている。また、東京仮博物場に陳列されていた資料の一部は、地方博覧会に出品されたのちに払い下げられたものを除き、閉場後に札幌本庁（札幌仮博物場および札幌農学校）、函館支庁（函館博物場）、上野公園地内博物館（現在の東京国立博物館の前身、以下年代を問わず東京国立博物館と記述する）に移管されることとなった。この移管資料のうち、アイヌ民族資料は、函館博物場に移管されたとされている¹⁸⁾。以上の点から、本報告の主題である北大植物園・博物館が所蔵するアイヌ民族資料には、当該期に収集されたものは含まれておらず、この時期の収集意図についてはあえて検討する必要はないとも考えられる。しかしながら、ここでこの時代の状況について検討する理由は、札幌仮博物場時代の資料収集の様子を示す史料がほとんど残されていないこと、また農商務省の管轄下にあった札幌博物場の時代の状況を参考にするよりも、開拓使がアイヌ民族資料をどのように考えていたかに着目する必要があると考えるからである。

当該時期にアイヌ民族資料がどのように考えられていたかについては、三浦（2000,2001）による詳細な検討がある。三浦の主眼は、ウィーン万博や各地における博覧会、東京仮博物場に出品、展示された陳列品を通じて、北海道およびアイヌがどのように見られていたかという点にあるが、博搜された多くの史料の端々に、開拓使による資料収集の意図を読み取ることができる。三浦に依拠しつつ、この点について確認してゆこう。

〔ウィーン万博出品資料収集の時代〕

開拓使による資料収集は、ウィーン万博に出品することを目的とした1872年正月付の博覧会事務局からの収集指示が始まりである。北海道において収集すべきものとして博覧会事務局から送られた「北海道産物之大略」には137種が列記されており、「人造物之部」とされた23種にアイヌ関係資料が多く挙げられている。開拓使は、この「大略」に沿う形で資料を収集し、277点のアイヌ関係を含む1,104件の北海道産物が博覧会事務局へと提出された。ウ

ィーンに送られた北海道産物のうち、アイヌ民族資料、毛皮、鉱物類など151点は、博覧会における区分の中で『区外蝦夷朝鮮物品目録』に収められた。北海道産物が「区外」として位置づけられたことについて、三浦(2001)は「いまだ『形式的領域』であった北海道が日本の『内国』であることを、万国博覧会という国際舞台で強調しようとする意図」があり、アイヌ民族資料はそれを「視覚的に象徴する『産物』として意識され、陳列された」と評価している。この考え方に従うならば、展示されたアイヌ民族資料のあり方は、優れた工芸品としての位置付けを示すものではなく、その時点におけるアイヌ民族そのものを示すための存在であり、収集にあたっては美術的要素や工芸技術の巧みさなどを提示するなどの特定の目的ではなく、網羅的な収集を行うことが意図されていたとみられる。「北海道産物之大略」にも「製造物ハ風土ヲ見ルベキ品々其他何ニテモ製造シテ用ニ供スルモノハ必差出ス可シ」とあり、網羅的な収集を意図していたことは間違いない。

次に、収集主体である開拓使の意図についても確認してみたい。開拓使においてウィーン万博出品物の収集にあたった北海道物産取調掛は「一品モ御使博覧物局ニ取収メ、今日ヲ基立ニテ追々広御取集メ、他日博覧之用ハ勿論、北海全島開化之進歩ヲモ御証明可被成事」という考え方をもっていた。開拓使機構そのものがこの考えをどのようにとらえたかについては判断が難しいが、ウィーン万博出品の一環として資料を集めるにあたっては、「北海全島開化之進歩」の証明のために、開拓使にも保存しようと考えていたことは疑いが無い。つまり、動物にせよ、鉱物にせよ、アイヌ民族資料にせよ、今後の「開化之進歩」の立脚点となる、北海道の「ありのまま」を示す材料を収集・保存しようと考えていたものと推測される。物産取調掛がまとめた「書載方之大概」の「土蕃古昔穴居ヨリ開化之進歩シタル方今家居之雛形」、「土蕃居宅之内部日用器械ヲ配置シタル図」、「土蕃平生家ニ在ツテ日用ヲ弁スル為ノ従古彼ノエト拵トニ成立之品類」、「土蕃旅行之為ニ用ユル器械一式」という表現にみるごとく、この収集活動においては「日用」、「平生」、「一式」という観点から収集されていたのである。

〔東京仮博物場・札幌仮博物場時代〕

次に、東京仮博物場時代の資料収集の意図について検討してみたい。すでに触れたように、東京仮博物場は「全道之物産」が「富饒」であるという知識の普及、北海道移住の勧誘という役割を担っていた(三浦2000)。その役割の実現には、自然の恵みの豊かさに加え、今後の産業発達への期待を抱かせるような陳列品が必要とされただろう。実際、東京仮博物場から札幌本庁に出されたアイヌ民族資料購入依頼に「全道之土人モ追々開発其工事モ方面ニ從ヒ相異ナリ候ニ付、各地方當時専ラ生出スルモノヲ相撰ミ土人ノ伎倆ヲ推察スルカ為メ之旨意¹⁹⁾」とあるように、各地のアイヌの「伎倆ヲ推察」することができるような陳列品を求めている。つまり、ウィーン万博の収集とは異なり、良品を選択して陳列を行い、北海道を魅力的な存在として見せる方向に変化しつつあったものと考えられる。三浦(2001)が論ずるように、この流れは1877年に開催された第一回内国勸業博覧会を経てより勸業政策に結び付いたものとなってゆく。内国勸業博覧会の「出品主心得」には「今般勸業博覧会ノ義ハ、古器珍物ヲ出品スルノ趣意ニ無之、専ラ後来ノ見込有之物品ヲ差出候様²⁰⁾」とあり、「専ラ古器珍物土人調度及ヒ動植物ニ至ル迄都テ出品²¹⁾」したウィーン万博の目的とは異なっているという認識があった。これに対して、開拓使は「人造物ハ当道ニ於テ新發明ノ分ヲ収纏メ開化ノ進歩ヲ証スル為メ差出度事」、「土人家内ニ在テ日用ヲ弁スル為ノ器械並旅行器械等ノ類ハ差出不申積リ」、「土人獵漁器械其他細工物ノ内、茗臺、糸巻、手拭掛、盆、マキリ鞆ノ類精好ナルヲ撰ミ差出」すこととし、出品された資料の多くは「アイヌ工芸品」といわれる資料や、開拓使が産業として期待していた漁労具などであった。内国勸業博覧会後に開催された各地方の博覧会においては、これらの資料が製品として注目されるようになっており、開拓使が収集するアイヌ資料は「開化之進歩」の立脚点としての資料ではなく、「進歩ヲ証明スル」到達点としての資料となっていったものと考えられる。

第一回内国勸業博覧会の年に開設された札幌仮博物場における資料の収集意図を見出す材料は、アイヌ民族資料に限らず乏しい。「年ヲ追テ物品増加シ」とされる資料が、1973年に設置された物産局博物課の収集活動の延長にあったのか、1877年に仮博物場が設置されてからの活動の様子であるのかについては判然としないが、北大植物園・博物館の現存資料には1877年以前に収集されたという記録のある資料は含まれていないことから、博物課からの引

継資料はほとんどなかったのではないかとされる。このように考えるならば、東京仮博物場と同様に「博覧會一切ノ事務」を担うことになっていた札幌仮博物場では、「開化之進歩」を証明するための工芸品、産業製品を重視していたのではないかと推測される。ただし、前節でみたように、札幌仮博物場は展示機能がそれほど充実していたとは考えづらく、展示を通じた「開化之進歩」の証明や産業発達への誘引ということに重点が置かれていなかった可能性があること、開拓使札幌本庁の膝元という利点を生かした新設の博物館であることから、工芸品・産業製品一辺倒ではなく、網羅的な収集も並行して行われていたと推測される。

〔札幌博物場時代〕

農商務省移管以降の札幌博物場は、勸業施設の色彩の濃い博物館に変化していった。アイヌ民族資料も産業製品としての役割がより重視されてもおかしくなかったが、「中外農産及製品等模範トナルベキモノハ東京ノ博物館ヨリ分配セシムベシ²²」として、勸業の模範は東京から送られるものによって提示されることとなった。これは、北海道の開拓、産業の発達を目的とした開拓使と、日本国内全域の殖産興業を目的とした農商務省との考え方の相違を示しているのだろう。これによりアイヌ民族資料は考古関係資料とともに史伝部として「史伝ノ考徴ニ供スル」ための存在として位置づけられた。収集目的が判明する史料としては、農商務省北海道事業管理局時代の1884年1月に行われた収集の記事がある。

土人器物採集ノ為め胆振国千歳郡ニ場員ヲ派遣シ且ツ同郡長都村ニ於テ旧土人ノ執行セル所謂熊祭ナルモノヲ調査セシム、該祭ハ土人ノ大礼トスル所ナリト雖トモ皇化ノ治及ニ随ヒテ漸ク湮滅ニ歸セントスルヲ以テ其祭器ハ之ヲ購求若クハ模造シ尚略図等ヲ以テ之ヲ伝ヘ以テ致古ノ資ニ供セントス²³

ここにみるように、アイヌ民族資料は「史伝ノ考徴ニ供スル」ための資料として収集されるようになったのである。なお、この史料には、1883年12月から翌年11月までの収集資料の増加一覧表が添付されている。この1年間で天産部(動物・植物)が85種、史伝部(アイヌ民族資料)が63種増加しているのに対し、勸業部は309種の大幅な増加となっている。勸業部資料の増加は、「概ネ東京博物局トノ交換²⁴」により入手したものであり、札幌博物場職員による各部の収集資料数に違いはないと考えられる。しかし、2章で紹介するように、札幌博物場は交換のために「不用物品并ニ重複品」とされたアイヌ民族資料(北海道・樺太)、ロシア、中国資料、古器物数点など60点余りを博物局に送付している。資料の充実のために交換を行うことの意義は評価するが、「不用」とされた資料がすべて史伝部の資料であったことは、札幌博物場におけるアイヌ民族資料の相対的な地位の低さを読み取ることができる。

ここまで、ウィーン万博に出品するための収集から、農商務省所属時代までの10年余りのアイヌ民族資料の収集意図の変遷を確認してきた。まとめるならば、アイヌという存在そのものを陳列するための網羅的な収集から、北海道開拓事業と結びつく工芸品、漁労具などを重視する方向への変化、そして、農商務省の所管となったことで産業資料としての位置付けから外れ、史伝資料として扱われるようになっていったという流れである。もちろん、この見解は残された史料をつなぎ合わせただけであり、実態を示しているのかどうかはさらに検討が必要である。また、意図というものは断絶するものではなく、上に挙げたアイヌ民族資料への意識の流れは複雑に絡み合っていたに違いないので、収集されたアイヌ民族資料の特徴が明確に区分できるとは考えられない。しかし、家屋や櫓などの模型資料が多いことから、博覧会向けとしての収集資料であると位置づけられたり、「アイヌ工芸品」としての役割を意識した収集によって成立した資料群であると従来漠然と一括して評価されていた当該期の北大植物園・博物館所蔵資料の中には、(1)北海道とともに存在するアイヌそのものへのまなざし、(2)北海道開拓、産業発達の道具としてのまなざし、(3)開拓前のアイヌ文化を歴史として見るまなざしといった観点から収集されたものが混在しているということを前提に利用する必要があるだろう。

1-3 札幌農学校～北海道大学農学部博物館時代

1884年7月、札幌博物場は札幌農学校の所属となる。移管の目的は、札幌農学校に設置されていた標本室(学術

上の標本を陳列)と札幌博物館(勸業の模範資料を陳列)とを一体的に運営し、相互の機能を補完し合うためであった。移管前の検討では、札幌博物館は勸業資料の陳列、農学校標本室は学術資料の陳列と従来の役割を維持することが前提となっており、職員もそれぞれに勤務していたようであるが、移管された年の冬に博物館の詰所であった札幌博物館の建物が積雪による破損によって利用できなくなったことで、博物館の職員も農学校に集約されることになったようである²⁵。1885年の「博物館日誌²⁶」には博物館の職員、農学校標本室の職員ともに活動の様子が記載されるようになっており、1884年の標本数と農学校標本室が統合された1886年以降の標本数との間に大幅な増加がみられないことから、農学校標本室と博物館は1886年の統合前から一体となって機能していたものと考えられる。

以降の歴史は、所属する農学校、大学の名称変更に伴うものがほとんどであり、組織上の大きな変革は少ないので、アイヌ民族資料にかかわった職員の異動を加えた年表²⁷で整理しておく。

- 1884年 札幌博物館、札幌農学校に移管され札幌農学校所属博物館となる(7月)
- 1886年 北海道事業管理局廃止に伴い、札幌農学校は北海道庁所属(2月)
札幌農学校の標本室と統合(3月)
- 1889年 村田莊次郎、雇として着任(5月)
- 1895年 札幌農学校所属博物館と改称
- 1904年 八田三郎着任
- 1907年 札幌農学校が東北帝国大学農科大学となったことで、東北帝国大学農科大学所属博物館となる
- 1917年 村田莊次郎退官
- 1918年 北海道帝国大学農科大学博物館となる
- 1919年 北海道帝国大学農学部博物館となる
- 1922年 犬飼哲夫就職
- 1928年 八田三郎退官
- 1931年 名取武光就職
- 1947年 北海道大学農学部博物館となる
- 1949年 名取武光転出
- 1961年 犬飼哲夫退官
- 2001年 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園となる

1-4 札幌農学校以降の博物館におけるアイヌ民族資料の収集意図・位置付け

ここでは、札幌農学校の所属となった1884年以降の博物館において、アイヌ民族資料がどのように位置付けられてきたかについて検討を行う。

〔農学校移管から八田三郎館長の時代〕

札幌農学校が独自に開設していた農学校標本室には、1882年時点でアイヌ民族資料は1点も所蔵されておらず、「学術上の標本」として位置付けられていなかったようである²⁸。一方、博物館でも1885年の「博物館日誌²⁹」からみる限り、古器物の採集や動物類の採集の記述はあるものの、アイヌ民族資料の収集活動を読み取ることはできない。1884年12月から1885年11月までの「博物館列品表³⁰」によれば、天産部の動物資料が106点増加しているのに対し、史伝部の図画が2点、勸業部は動物産物類が2点増加しているにすぎず、博物館においても、アイヌ民族資料の収集への意欲を見出すことはできない。

次に、1886年の標本室統合後の様子を確認してゆこう。1887年以降、毎年刊行された『札幌農学校一覧』では、農学校所属の博物館を次のように記述している。

本場ハ北海道所産ノ動植鉱物等ノ學術ニ裨益アルモノヲ蒐集陳列シ以テ学生研究ノ便ニ供ス

学生研究ノ便ヲ図リ、列品ノ秩序ヲ三門ニ区分シ即チ勸業部徴史部天産部トナス

本場ハ學術研究ノ為メ設置セシモノト雖トモ公衆ノ便ヲ謀リ(略)日水ノ二曜ヲ以テ開場縦覧ノ日トナス

1891年に展示公開の目的として「本道諸産ノ概況ヲ窺ハシメンカ為」という記述がなされること、1892年には三部門のうち徴史部が史伝部と図画写真部に分割され、四部門体制になるなど軽微な変更はあったものの、1895年まではほぼ同様の記述である。

農学校所属となった札幌博物場は、農商務省時代の勸業博物館的存在から「陳列品ヲ純博物館的二復³¹⁾」したとされる。実際、1893年には農商務省所管当時東京国立博物館との交換で入手した勸業部の資料を「不用ニ付返納³²⁾」するなど、札幌博物場時代の方針は払拭され、札幌農学校における学术研究のために必要な「北海道所産ノ動植鉱物等」を重視する、札幌農学校の標本室の活動が博物館の中心となっていたのである。既述したように、農学校標本室にはアイヌ民族資料は所蔵されておらず、この時期においてもアイヌ民族資料への関心は低かったとみるべきであろう。

ところが、1897年の『札幌農学校一覧』では「本道諸産ノ動、植、鉱及本道『アイヌ』人ノ製造ニ関スル各種ノ諸器物ヲ蒐集シ以テ学生研究上ノ用ニ供スル」ことを目的とするという記述に変わる。この件について、沖野(1999)は「博物館が札幌農学校に移管された後も(収集活動は停滞したが)『アイヌ民族資料』は常に意識され、重視されていた」と評価し、変化とはみていない。しかしながら、2章で詳述するように、この時期は博物館において資料管理体制が刷新され、1890年前後から生じていた混乱が修正された時期である。この刷新によってアイヌ民族資料が再整理されたということを鑑みるならば、アイヌ民族資料が人類学資料として整理され、再認識されるようになったことを示す、大きな変化とみるべきである。この記述は1922年に至るまで変更されることなく、引き継がれてゆく。1923年以降の『北海道帝国大学一覧』においては、博物館の歴史的経緯が述べられるにとどまり、所蔵・展示資料についての記述は見られなくなるが、1924年に刊行された『北海道帝国大学要覧』に同様の記述があることから、『一覧』に求められる記述が変更されたにすぎず、方針は継続していたと考えられる。

上記方針がとられていた1910年に博物館は『札幌博物館案内』という展示品解説の小冊子を発行する。この小冊子の編集者である村田莊次郎と、当時の館長(主任)であった八田三郎によって、アイヌ民族資料は人類学資料として体系的に分類、展示された³³⁾。また、八田は動物学者であったが、著書『熊』(八田1911)の中でアイヌについて言及を行い、1925年には「白老アイヌの生活」という映像資料も残している。八田は、自身が管理者として接するアイヌ民族資料が、急激に変容させられていた当時のアイヌの生活の中で見出せなくなっている現状を見て、当時の認識で「失われつつあった」アイヌ文化を記録することを目的として活動していた³⁴⁾。八田や村田の活動の結果、アイヌ民族資料が人類学資料として「学生研究上ノ用ニ供スル」存在となったこの時期について、沖野(2000a)は「当時のアイヌ民族資料は大部分、とくに明治初期に収集され受け継いだものを中心となっているが、資料自体はまったく同じでもその意味合いは明治初期のころとは全く異なる。(略)学問的な対象すなわち『民族学資料』(当時は『人類学標本』)として、動物学標本などの自然史資料と同等の位置付けとなって生まれ変わった」と評価する。沖野が見出したように、明治初期に収集された熊送りのヌサが、人類学標本として展示を構築するために意図的に手を加えられているという事実からすれば、このような評価は可能であろう。しかし、1点の資料の改変のみをもって、すべての明治時代収集資料が「生まれ変わった」と評価することには問題がある。この時期の変化とは、博物館の歴史の中で、単にアイヌ民族資料を利用・管理する側の見方、利用の仕方が変わったということであり、産業資料、史伝資料として収集されたという歴史をもつ個々の資料が、人類学研究のために体系的に収集された資料へと生まれ変わるわけではない。人類学研究のために収集されたと位置付けられるのは、この時期に収集されたもののみであり、それ以前の収集資料においては、「開化之進歩」を証明するためであったり、殖産興業の参考資料であったり、「史伝ノ考徴ニ供スル」ために収集されたという歴史的背景を持っていることには変わりないはずである。八田や、村田の業績を否定するものではないが、彼らの視点を通して開拓使、農商務省時代に収集された資料を見ることは、その資料が持つそもそもの価値を見失う恐れがあることだけは注意しなければならない。

札幌農学校所属となってから、八田らによる位置付けの変更までの間の資料収集の状況を整理しつつ、上記のアイヌ民族資料観の変化が、現存する資料にどのように影響しているのかについて確認してみたい。

2章でみるように、1887年8月に博物館助教授の小寺甲子二が礼文郡トンナイにおいて、数点のアイヌ民族資料を収集している。また、農学校の研究生であった野沢俊次郎は同年11月に収集したアイヌ民族資料を寄贈している。両者の収集はともに札幌農学校校長代理の佐藤昌介の命を受け、博物標本の収集におもむいたものであって、統合されて間もない農学校所属博物館の資料を充実させるために行われたものである。しかしながら、その収集の大部分は昆虫・植物・古器物であって、アイヌ民族資料を主眼としたものではない。1891年に函館博物館が閉館し、函館商業学校および水産博物館に資料が引き継がれることになった際に、小寺甲子二が「学術上并ニ衆庶之為」農学校所属博物館に「一、鳥類標本悉皆 一、アイノ人之器具衣服等悉皆 一、近藤重蔵之エトロフ北端二建テシ木標³⁵」を移管してほしいと活動した件を挙げることもできるが、この働きかけは実現していない。

これ以降に収集されたアイヌ民族資料は、19世紀中では岡部方幾、新渡戸稲造、三宅勉、宮城鉄夫³⁶の寄贈による15点ほどであり、博物館による主体的な収集をそこにみることはできない。博物館関係者の収集によるものと推測される1910年代初頭の10点の資料と、千歳の熊送りの際に譲り受けたという記録のある5点を含む7点の1926年収集資料、八田三郎によって撮影された白老村の生活の映像資料、展示用に再構成された熊送りのヌサを除けば、当時の博物館のアイヌ民族資料観が反映されている資料は現存していないのである。

アイヌ民族資料の位置付けが低かった農学校移管当初は別として、19世紀末からアイヌ民族資料が人類学資料として再認識されるようになったにもかかわらず、なぜ収集が活性化しなかったのか、この点について検討してみたい。

結論を先にいえば、札幌農学校所属博物館による収集資料の特徴(制限)を生み出す最大要因は、「大学博物館」であることである。開拓使時代や農商務省時代のように、博物館の目的、収集活動の目的や対象が明確になっている博物館とは異なり、農学校所属博物館の目的は現在に至るまで「学術ニ裨益アルモノヲ蒐集陳列シ以テ学生研究ノ便ニ供ス」、「学生研究上ノ用ニ供スル」ことである。クラークらの外国人教師が頻繁に学生をフィールドワークに連れ出し、標本を収集していたことはよく知られているが、その過程で得た標本を保管する施設として、また、参考資料として外国産の自然史資料を保管する施設として、農学校の標本室は設置された。教育研究の参考資料が整っていなかった草創期には、あらゆる資料・標本を収集し、利用できるようにすることが「学生研究ノ便」につながっていたものといえる。この方針は札幌博物館が農学校所属となっても継続され、小寺や野沢への標本採集の指示もこの一環といえる。この段階では、博物館が学生研究のために果たすべき役割は、教科書・図鑑としての存在であり、収集すべきものは明確である。しかし、必要とされる標本・資料が整ったことに加え、西洋式の学問体系を学んだ農学校卒業生らが教育に携わるようになり、教育体系が整備された段階で、この役割は変更されることになる。

1890年に博物館が所蔵していた植物標本類3,640点が「植物学教授上ノ都合」により本校へと移管³⁷されたことに端的に表れているように、教員・学生らは研究に利用しやすいように、標本類を手元に置くようになり、大学における収集資料は受動的に学ぶ材料から主体的に利用する研究資源となってゆく³⁸。教員や学生が参考資料として必要なものを博物館ではなく手元に置き、新たな研究に必要なものは自身で採集できるようになった時点で、博物館自体が「学生研究ノ便」のためにできる活動はほとんどないといってよいだろう。ここで大学博物館ができることは、①学内で教育研究がおこなわれていない分野の資料収集・保管を担当すること、②教員・学生らが必要としなくなった研究資源を保存管理し次世代に引き継ぐこと、③博物館職員の能力・関心に応じた収集を行うこと、④学外からの資料を引き受ける窓口としての役割などが挙げられるだろう。1890年以降の博物館の収集資料の特徴からいえば、農学校で教育・研究がおこなわれておらず、村田莊次郎という優れた採集・剥製製作技術を持った職員が在職していたことで得られた鳥類標本が大部分を占め(①・③)、次いで北海道庁や民間からの考古資料や日清戦争戦利品の寄贈が多い(④)。②は現在の大学博物館に強く求められているものであるが、当時はそれほど研究成果の証拠を保存しなければならないという意識が強くなかったこと、学問体系が細分化されておらず、また研究の進展速度もそれほど速くなかったことから、研究上不要となるものが発生しにくかったためか、受入れ資料として見

出すことはできない。しかし、植物学の学生であった三宅・宮城らがアイヌ民族資料を、植物学の教員である宮部金吾が鳥類標本やコウモリ標本を、工学の教員である広井勇が鳥類標本や考古資料を、水産学での業績で知られる藤村信吉が鳥類標本を寄贈しているなど、調査研究の過程で得た不必要資料を博物館に寄贈するという歴史にその一端を見出すことができる。

博物館の職員が在職中に収集した資料をすべて博物館に保管するのではなく、自身の研究に利用するために、異動先に持ってゆくなどの歴史的経緯をみれば、彼らも大学の教員として位置付けることができる。結果として、大学博物館の資料は博物館が主体的に収集するものではなく、関係する研究者によって収集され、かつ博物館に残そうと考えられたものを中心となる。つまり、博物館による「収集」ではなく、博物館への「集積」になるのである。

八田三郎自身は研究者であり、その関心の変容しつつあった同時代のアイヌ文化ではなく、博物館に収蔵されていた明治初期のアイヌ文化にあった。同時代の民族資料の収集よりも映像としての記録を重視するという研究方針、アイヌ文化そのものよりも、ヒグマという動物資料を主眼とした研究方針を八田がとったことから、この時代には民族資料が収集されなかったといえるのである。

大学博物館が所蔵することになる個々の資料が持つ歴史的背景は、それぞれの収集者の意図によるものであり、博物館そのものの意図が反映されることはほとんどない。それゆえ、大学博物館となってから集積された資料を利用する場合には、博物館関係者の資料観ではなく、収集者の資料観、収集意図に注意を払う必要がある。

〔犬飼哲夫・名取武光の時代から現在まで〕

大学博物館としての機能は、農学校の時代から現在に至るまで継続しており、研究者からの寄贈という受動的な収集活動が中心となっている。ところが、1931年から33年にかけてのみ残されている『北海道帝国大学年鑑』では、博物館の事業としてのアイヌ民族資料収集の活動を確認することができる。

(1931年)

一、博物標本収集（鳥類・ヒグマ資料・頭骨、北海道産毛皮など：括弧内は引用者によるもの）

二、人類学参考品蒐集

主トシテアイヌ民族ニ関スルモノニシテ其ノ有史的日用品ト先史的遺物遺跡ノ蒐集発見ヲナス、十月中札幌市犀川会ト協力シテ江別村ノ古墳発掘ヲ試ミ各種ノ遺物遺跡ヲ発見セリ、又五月ニハ南洋パラオ島土人ノ日用品約五十点ヲ購入セリ、此外各地ノ人類学同好者ヨリ送附シ来レル資料ヲ鑑定受理ス、又早大西村眞次博士及東北帝大喜田貞吉博士等二人類学的事項ニツキ調査報告及材料ノ提供ヲナセリ

三、動物飼育（孔雀・高麗雉・伝書鳩の飼育）

四、標本整理（鳥類標本、土器石器の整理、ブラキストン標本の整理）

(1932年)

一、博物標本収集（昨年同様に実施）

二、人類学参考品蒐集

蒐集ノ範囲ハ主トシテアイヌ民族ニ属スルモノニシテ本年ハ七月及八月ノ両月ニリ利尻、礼文両島及積丹半島ニ於テ史前学的調査ヲ行ヒ多数ノ標本ヲ得タル外江別郡江別兵村ニ於テハ古墳墓ヲ、又野幌ニ於テハ竪穴ヲ何レモ発掘シ、斯学研究上多大ノ貢献ヲ齎ラシタリ

以上ノ外本館ハ各地ノ人類学研究者ヨリ提出ノ資料鑑定ノ依頼ニ応ジ、或ハ蒐集者ノ希望ニヨリ学界ニ之ヲ紹介シタルモノ多数アリ

三、動物飼育（高麗雉、仔熊を飼育し、習性に関する観察を行う）

(1933年)

一、動物学関係

(略) 就中北海道産狼ノ頭骨二個ハアイヌノ祀レルモノニシテ稀有ノ資料ナリ(略)

二、人類学関係

四月及五月 江別兵村ニ於ケル古墳墓ノ発掘

六月 北海道原始文化展覧会ノ後援江別兵村ニ於ケル古墳墓ノ発掘

七月 南千島ニ於ケル考古学的調査

八月 近文アイヌ空知新次郎ヲシテアイヌ土俗品ヲ製作セシム

九月 日高静内ニ於ケルアイヌ研究。江別兵村ニ於ケル古墳墓ノ発掘。御紋章入箱館戦争記念官軍軍旗ノ寄贈ヲ受ク

十二月 八雲郊外ニ於ケル古墳墓ノ発掘八雲アイヌ酋長椎久トイタレクヲ聘シアイヌ古式ニ依リイヨマンテノ儀式ヲ行フ

1932年までは人類学資料の対象として「アイヌ」を中心に据えつつも、実際の活動は考古学調査が中心となっている。しかし、1933年になると明らかに同時代のアイヌ民族資料の収集、研究が博物館の事業としておこなわれている。上にみた博物館活動のうち「人類学」関係のほぼすべてが、1931年に助手として博物館に勤務した名取武光の業績に結びついており、この事業は名取の影響によるものといえる。また、2章でみるように、この時代に多くのアイヌ民族資料が博物館で購入されていることも確認される。この時期になって、大学博物館が主体的にアイヌ民族資料の収集活動を行う組織へと大きく変化したようにみえるのである。

しかしながら、はたしてこれを博物館の事業として位置付けることが可能であろうか。名取が収集した考古資料、民族資料は適切に情報が付与され、現在も博物館の資料として保存されている。一方、八田の後を受けて館長となった犬飼哲夫が中心となって収集していたヒグマ頭骨や毛皮類は、動物学教室との協力の下実施されたという関係もあるが、近年にいたるまで博物館ではなく動物学教室に保管されていた。また、名取の収集したアイヌ民族資料の一部も、著作執筆のため貸し出され、晩年に至るまで名取の手元にあった。また、この時期の収集資料は、名取の研究対象となった花矢、キケウシパシュイ、鉾先など特定の器種が大部分を占める。これらをふまれば、「博物館の事業」として行われたアイヌ民族資料収集活動は、博物館資料の充実という観点からではなく、名取の必要とする資料を、博物館の業務として収集したものと評価される。いわば、名取がそれを博物館に残すべきものと位置付けたために、博物館資料として後世に伝わり、現在も利用できるにすぎないのである。この時代の博物館の収集方針が、名取によって作り出されたことは間違いないが、この方針は機関としての博物館としてのものではなく、研究者としての名取の収集方針であると評価しなければならない。

1935年以降になると、犬飼哲夫もアイヌ研究に携わるようになる。犬飼の収集は、動物学者として熊送りや熊の解体方法などのアイヌと動物との関係に主たる関心を持っていたと考えられる点、アイヌ文化を「失われてゆくもの」という認識を持ち、記録・保存するための映像収集にあたっていたと考えられる点、その一環として各地の熊送りのヌサを収集していたが、収集にあたっては動物学資料としてのヒグマ頭骨を提供して作製させた(沖野 2001)と考えられる点などが特徴といえる。犬飼の収集意図が名取と共有されていたのか否かは判断が難しいが、資料自体はそれぞれの研究対象として収集されており、個々の資料については収集者それぞれの意図が投影されているだろう。1935年以降の収集資料においても、個々の資料が有する収集背景は研究者の意図であることは変わらないが、名取・犬飼の二人の収集意図による資料が混在していることに留意することが必要である。

名取・犬飼の異動、退職後にはアイヌ民族資料の収集活動が継続されなかったことから、多数のアイヌ民族資料が収集された1930年代においても、大学博物館としての収集形態に変化はなかったものと考えられる。沖野(2001)が詳細に述べているように、名取の収集意図が形成される上で、博物館に多数の民族資料・考古資料が所蔵・展示されていたこと、また館長として影響力を持った八田三郎や犬飼哲夫の研究スタイルが大きな影響を及ぼしたことは疑いない。また、1930年代には博物館を取り巻く民族学者、歴史学者の活動も盛んとなっている。これらの影響を踏まえない限り、名取や犬飼の収集意図を読み解くことは難しい。ここでそれに立ち入ることはできないが、現存する民族資料を用いる上で考慮すべき点は、資料を収集し、博物館に残した名取・犬飼自身の収集意図であり、歴史的経緯や周囲の状況は間接的なものとして位置付けるべきであろう。

名取・犬飼の在職中、退職後も散発的にアイヌ民族資料は受け入れられているが、いずれも大学博物館としての「収

集」ではなく、「集積」という形での受入れと評価されるものである。これらがなぜ、北大植物園・博物館に「集積」されたかについては受入れ側である博物館が残すべきであると考えたためであり、所蔵資料全体の傾向については博物館の考え方が反映されているといえる。しかし、個々の資料がもつ資料価値としての収集意図は、すべて資料の収集者（研究者・寄贈者）の意図によるものである。

以上、煩雑な検討を続けてきたが、総括することとしたい。

①開拓使の時代（～1882）に収集されたものについては、設置者である開拓使のアイヌ民族資料観の変化に伴い、収集対象としての位置付けも時代によって多少の変化が生じているものと考えられる。前期は「アイヌ」という存在そのものを展示する資料として、後期は勸業資料として収集されたものである。

②農商務省の時代（1882～1884）に収集された資料は、勸業資料ではなく史伝資料として収集されたものである。

③札幌農学校・北海道大学の時代（1884～）に収集された資料は、博物館としての収集意図ではなく、個々の資料を収集した人物の意図に基づくものである。研究対象として収集したものだけではなく、別の調査の過程で偶然入手したものなどが含まれており、個別に検討する必要がある。

2. 北大植物園・博物館のアイヌ民族資料管理史

本章では、北大植物園・博物館に所蔵されるアイヌ民族資料が、どのような過程で収集・集積されてきたのかについて、各年代の管理記録、受入れ記録などの整理を通じて明らかにする。この整理の中で、時代ごとの収蔵資料と現在所蔵されている資料との照合を試み、収集年代の情報が欠落している資料についても、おおよその受入れ年代を把握できるようにしたい。なお、北大植物園・博物館所蔵資料に関する史料については、資料が多様であること、点数が多いことなどから、これまで断片的にしか紹介されてこなかった。本報告では、紙幅を費やすことになるが、アイヌ民族資料に関するすべての記録を紹介することとする。

以下、それぞれの検討項目の冒頭に《 》で括った数字を置き、引用する場合にはその数字を用いることとする。また、【 】で括った数字は、現在の資料番号を示す。

〔札幌仮博物場時代の所蔵資料〕

歴史的背景で確認したように、開拓使におけるアイヌ民族資料収集はウィーン万博への出品を目的とする活動に始まる。この収集による資料は、東京の博覧会事務局に送られ、ウィーン万博に出品されたものと、東京に残されたものが現存している。

1877年に開催された第一回内国勸業博覧会に出品するために収集された資料についても把握することはできるが、出品されなかったものも含め、博物館に収蔵されたかどうかを確認することができないので、ここでは割愛する。

〔札幌仮博物場所蔵資料〕

《1》「博物館陳列品現在表」：1882年7月時点の所蔵アイヌ民族資料

札幌仮博物場の所蔵資料については、『開拓使事業報告』と農商務省博物局に移管された際の引継資料³⁹から把握することができる。『開拓使事業報告』では所蔵資料が分類ごとにまとめられ、総数2,554点が確認されるものの、そこにはアイヌ民族資料に該当する項目はなく、利用することができない。一方、引継資料の「博物場陳列品現在表」には、1882年7月時点の所蔵資料すべて、つまり開拓使時代に収集された資料が記載されている。そのうちのアイヌ民族資料について表1にまとめた。

アイヌ民族資料は「土人部」にまとめられ、126種類251点が記載されている。それぞれには整理番号と評価額が記されているが、収集年代、収集地などの記載はない。沖野（1999）は、当該期の収集記録のある現存資料と突き合わせ、35点の資料を「博物場陳列品現在表」に対応させた⁴⁰。その結果は妥当なものとして評価できるが、現存資

料や管理台帳には、この「博物館陳列品現在表」に対応する記述が全くないため、収集記録のある資料であっても厳密な照合は困難である。

〔農商務省時代〕

《2》「列品録 1 明治17年」：勸業資料との交換による減少分

史伝資料として扱われた農商務省時代の収集資料について確認する前に、この時代に手放したアイヌ民族資料について確認しておきたい。現在北大植物園・博物館に所蔵していない資料について確認する理由は、それ以前の管理記録からそれらを除外することで、現存資料との対応をより確実なものとするためである。

1882年10月に、田中芳男によってまとめられた「札幌博物場ノ目的ニ付意見⁴¹」には、「中外農産及製品等模範トナルベキモノハ東京ノ博物館ヨリ分配セシムベシ、因テハ當場ニ不用ノ物品并重複品等ハ東京ノ博物館ヘ回スベシ、然ルトキハ有無交換シテ互ニ利益アラン」という記述がある。この計画は、札幌博物場が農商務省博物局から、北海道事業管理局へ移管されることで実行が急がれ、1883年2月に北海道事業管理局への「事務引渡前二」送付するようにと農商務省博物局から札幌博物館場長宛に書類が作成された。これを受けて、札幌博物場から同年9月に東京に「不用物品并重複品」が送られた。その目録が表2である。

東京に送られた「不用物品并重複品」は史伝部に属するアイヌ関係資料41点、ロシア・中国資料合計15点と若干の古器物である。これらを東京国立博物館で明治16年10月北海道事業管理局からの寄贈資料として位置付けられている資料と比較すれば、表2の照合結果のように大部分が目録に合致する。このうち9件には「北海道管理局引継品 十六年十月」という記載とともに品名と番号が記載されたラベルがあり、その番号と目録番号が合致することから、目録と資料との対応関係は明らかである⁴²。《1》の「博物館陳列品現在表」と北大植物園・博物館資料を対比する上では、表2に記載のある資料が減少していることに留意しなければならない。

なお、東京国立博物館の北海道事業管理局引継品資料のいくつかには、北大植物園・博物館所蔵資料に付属するラベルを確認することができる(写真1・2・3:写真は北大植物園・博物館所蔵資料に付属する同種のもの)。これらの資料が札幌博物場所蔵資料であったことの名残である。北大植物園・博物館所蔵資料のうち、これらのラベルが付属する資料を表3にまとめた。東京国立博物館に寄贈された時期と、収集記録として最も時代の下る1884年1月25日という情報から、これらのラベルの付属する資料は、収集年代の記載がなくとも、1883年10月以前から、遅くとも1884年1月には間違いなく札幌博物場において管理されていたものである。つまり、《1》および後掲《4》



写真1

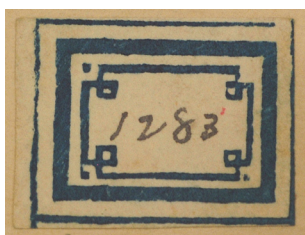


写真2

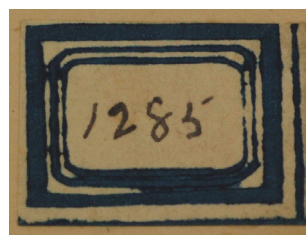


写真3

の管理記録に含まれる資料であり、開拓使時代ないし農商務省時代の収集背景を有する資料と位置付けられる。

ここで、上記した東京国立博物館の「北海道管理局引継品」という記載のあるラベル(写真4:写真は北大植物園・博物館所蔵資料に付属する同種のもの)について触れておきたい。北大植物園・博物館に所蔵されるいくつかの勸業資料にこのラベルが確認され、それらには「明治17年3月、東京産」という受入れ記録がある。旧稿(加藤2004)では、この受入れ日が東京仮博物場から函館博物場へのアイヌ民族資料移管日に近いという理由から、このラベルを東京仮博物場あるいはその残務処理を



写真4

行っていた機関で利用していたものと推測し、これが付属する資料を東京仮博物館から札幌博物館に移管された資料と考えた。しかしこれは全くの誤認であった。札幌博物館から東京国立博物館への資料移管に対し、交換として札幌博物館に送られた資料目録⁴³が残されている。この目録を確認すれば、現在北大植物園・博物館に所蔵されている「明治17年3月、東京産」の勸業資料と合致することは明らかであって、写真4のラベルは当時の農商務省博物館が利用していたものとみなしなければならない。このラベルに対する誤った評価に基づき、東京国立博物館所蔵資料の一部を東京仮博物館旧蔵資料と推測した点について撤回する。

〔東京仮博物館旧蔵資料について〕

《3》「列品録 1 明治15年」：東京仮博物館から東京国立博物館に移管された資料

上記のように、東京仮博物館の資料が札幌博物館の管理下にあり、その一部が東京国立博物館に送られたという旧稿の推測は、誤りであった。ここでは、旧稿以降に行った東京仮博物館資料に関する調査結果について補論として提示したい。

『開拓使事業報告』によれば、1875年段階で東京仮博物館のアイヌ民族資料は「製品」に分類され、「土人衣類」12点、「全靴類」8点、「家具類」18点、「器用雛形」11点が展示されていた。しかし、東京仮博物館の資料は地方博覧会に多数出品され、ときには売却されていたことから、資料数は頻繁に増減を繰り返していたものと推測される。このため、その全体像を把握することはできない。

東京仮博物館は1881年に閉場され、その資料は札幌仮博物館、札幌農学校、函館仮博物館、東京国立博物館へと分割された。分割された資料のうち、アイヌ民族資料の行方として知られているものは、1884年8月に函館博物館に受入れられた北海道アイヌ資料73点と千島・樺太関係資料63点に含まれるもののみである（関・中田・千代1990）。東京仮博物館旧蔵資料がどのような特徴を有しているか把握するために、市立函館博物館所蔵⁴⁴の東京仮博物館資料について調査を行った。結果として、東京仮博物館の資料であることを示す共通のラベルなどの特徴を見出すことはできなかった。また、これらに散見された古い年代に利用されていたと考えられるいくつかのラベルは、そのいずれも北大植物園・博物館所蔵資料および東京国立博物館の北海道事業管理局寄贈資料に付属するものとは一致せず、東京仮博物館のアイヌ民族資料が函館博物館以外に移管されたという形跡を見出すことはできなかった。

一方、史料調査の側面からは、新たな知見を得ることができた。これまでも東京国立博物館が旧開拓使残務掛から1882年に「北海道水陸物産見本類」を引き継いでいた（東京国立博物館1971）ことは知られていたが、この引き継いだ見本類の中にアイヌ民族資料も含まれていた。引継目録⁴⁵によれば、「テンキ箆（千島国古守島産）式個」、「全煙草入（千島国古守島産）壺個」、「全箆（千島国新知産）大形式個」、「全横長 式個」、「全立長 式個」、「全茶臺 壺個」、「全吹（千島国古守産）大小式個」、「全帽子 壺個」、「ヨシ盆 式枚」の9種13点が東京国立博物館に移管されていることが分かる。

東京国立博物館が受け取ったこれらのアイヌ民族資料については、これまで言及されておらず、どのような扱いとなっているかについては不明な点が多い。しかし、東京国立博物館の現存資料と照合すれば、テンキ帽子は笠（25814：番号は東京国立博物館〈1992〉掲載のもの）に、テンキ箆横長や立長は煙草入（25828・25829）に、ヨシ盆は箆（25847）に該当する可能性が高い。これらは、現在「明治8年7月博覧会事務局引継」という形で管理されているが、情報が付与されなかった東京仮博物館由来の資料が博覧会事務局旧蔵資料として混入しているのではないだろうか。

これらの資料にラベルが付属しているかどうかは現時点で定かではないが、市立函館博物館の東京仮博物館移管資料と照合し、共通の特徴を見出すことができるならば、各地の博覧会や博物館に売却された東京仮博物館のアイヌ民族資料にも同じ特徴を確認できることが期待される。国内に残されたアイヌ民族資料には収集情報の欠落したものが多く、同じ特徴を有した資料が現存していた場合、開拓使東京仮博物館の収集意図に基づいた資料であることを見出すことができるだろう。今後の調査が期待される。

〔農商務省時代の管理資料〕

《4》「札幌博物場陳列品目録」：1884年6月段階の所蔵アイヌ民族資料

次に、農商務省時代の札幌博物場の管理記録について確認してゆきたい。1884年に札幌農学校に移管された際の引継資料の中に、当時の管理資料目録「札幌博物場陳列品目録」が含まれている。この目録では、アイヌ民族資料は史伝部の「旧土人用具類」として管理されている。沖野(1999)が紹介しているように「旧土人用具類」は(A)「明治十六年七月現在土人用具」(資料番号1-130：130種240点)、(B)「明治十六年二月ヨリ十二月迄旧土人用具採集調」(資料番号131-164：34種34点)、(C)「明治十七年一月ヨリ同六月迄旧土人器具採集調」(資料番号165-217：53種53点)に分かれ、総数として327点が確認される(表4)。

「札幌博物場陳列品目録」、特に(B)および(C)は、収集年次が限定されることもあり、現存資料との照合ができれば、収集記録のないものについても農商務省時代の収集資料であることが把握できる。しかし、《1》と同様に、この目録も整理番号はあるが収集地の記載などはなく、現存する資料との厳密な照合は難しい。この目録では「方言」という項目が設定されているため、沖野のように現存資料に付属するアイヌ名を利用して対応させることはできるが、現存資料のアイヌ名表記がこの時代に付与されたものであるかどうかについての検証が必要である。

また、表4と現存資料を対応させて、収集年代不明資料の収集時期を推測する上では留意点がある。(A)「明治十六年七月現在土人用具」の記述について、沖野は「十七年七月の誤りでA～Cを統合した表題とおもわれるが、文脈から判断して130番までの資料は実際には十六年一月までに収集されたもの」と判断した。これについて異存はない。しかし、1882(明治15)年7月の「札幌博物場陳列品現在表」(表1)の251点と比較して(A)が240点に減少している理由については、「開拓使廃止後に資料の一部が他の施設に移管された可能性」を指摘している点については補足が必要である。沖野がこのように述べた理由は、北海道事業管理局から東京国立博物館に資料が移管された時期が1883年10月であり、(A)の時期以降であること、また、《2》で確認した東京国立博物館への移管資料が、札幌博物場の「不用物品并重複品」であることがこれまで知られていなかったことにあると考えられる。しかし、表1と表4-Aを比較すれば、女ノ帯・刑杖・丸木船模型、煙草入れ、雪車、煙管、毛皮頭巾、糸巻きなど、管理資料数の減少には1883年10月の東京国立博物館への資料移管が反映されていることは間違いない。つまり、(A)は、1884年7月時点における、1883年1月以前に収集された資料の目録として位置付けられるものなのである。それゆえ、農商務省に移管された1882年7月以降、1883年1月までに収集されたアイヌ民族資料は、表1の251点から表3の41点を削除した210点から、表4-Aの240点への増加分である30点となる。現存資料のうち、当該期に収集されたという記録のある資料は、ヌサ(熊祭りの祭壇)【10179】、サラニップ【10997】、織具【10572】などがある。ヌサは表4-Aの末尾にあるものと考えられるが、すでに所蔵されている種類の資料がこの時期に収集された場合には新たに項目立てされず、資料点数のみが追加されているとみられることから、表4-Aの後半部にあることが1882年後期収集資料であることの証左とはならないことには注意しなければならない。

〔札幌農学校時代 農学校標本室統合前〕

札幌博物場が札幌農学校に移管されてからのアイヌ民族資料の収集活動は停滞していたが、博物館管理記録の中からその増減を見出すことはできる。ここでは、研究者としての教員らが深く関与していなかった時代、84年から86年ごろの様子をまず確認する。

《5》「明治一七年年報開申の件 所轄札幌博物場」

1884年の農学校年報に関する書類⁴⁶によれば、札幌農学校への移管前後の1883年12月以降、84年11月までに収集されたアイヌ民族資料点数は63点とされる。ここには表4-Cに含まれる1884年1月から6月までの収集資料53点が含まれているので、83年12月ないし、84年7月以降に収集された資料が10点あったと理解される⁴⁷。

この63点には「土人器物採集ノ為め胆振国千歳郡二場員ヲ派遣シ且ツ同郡長都村ニ於テ旧土人ノ執行セル所謂熊祭ナルモノヲ調査セシム、該祭ハ土人ノ大礼トスル所ナリト雖トモ皇化ノ治及ニ随ヒテ漸ク湮滅ニ歸セントスルヲ

以テ其祭器ハ之ヲ購求若クハ模造シ尚略図等ヲ以テ之ヲ伝ヘ以テ攷古ノ資ニ供」する目的で1884年1月に収集された熊送り関連資料が含まれているとされる。しかしながら、現存資料では1884年1月という記録を持つものは沙流におけるもののみであり、千歳での収集は4月に行われている。また、千歳・沙流いずれの収集資料も熊祭り関係資料であるとは位置付けがたく、この史料の裏付けが取れない。現存資料の中で、当該期の採集という記録があるものは40点弱であり、20点近くの資料から収集年代記録が欠落していると考えられるので、記録のない熊送り関連資料の中にも含まれている可能性もあるが、「千歳」収集という記録のあるものの中にもそれに該当する可能性のあるものは見出せない。史料上の収集日、収集地に誤りがあるのか、全く収集情報のない現存資料の中にこれらが含まれているのか、検討を要する部分である。

《6》「明治十八年 自十七年十二月至十八年十一月 博物場列品表」と同年収集資料

つぎに、1885年の資料収集の状況について確認したい。同年の資料増減表である「博物場列品表⁴⁸」によれば、アイヌ民族資料は340点で当該期の増減はない。また、当該年の1月より11月までの「博物場日誌」にも受入れについての記載はない。一方、現存資料には1885年収集という記録のある資料は7点⁴⁹存在する。「博物場列品表」以降に確認できるアイヌ民族資料点数が、1886年3月以前の356点《8》ないし、1887年4月以前の353点《11》であることからみて、これらは1885年12月以降、翌年3月までに受け入れられたものと推測される。いずれも根室・厚岸・千島など道東地域の収集資料であり、沖野(1999)が推測しているように、同年11月初旬に根室で開催された北海道物産共進会の資料であるのかもしれないが、管見の限りそれを裏付ける史料は見出し得ていない。典拠は不明であるが、難波(1987)によれば1885年収集の鳥皮衣【80】および【81】は、北海道庁が同年に色丹島で入手したものが博物館に寄贈されたという。

なお、「博物場列品表」では資料の減少の記述はないが、《7》にみるように少なくとも当該期に2点の資料が減少している事実があるので、「博物場列品表」の増減数が実態を示しているとは言い難い部分がある。

《7》1885年「博物場日誌」：万国発明品博覧会への出品

つぎに、1885年の資料減少について述べる。「博物場日誌⁵⁰」1月5日の項に、「英国電動府ニ於テ萬国発明品博覧会開設ノ義ニ付、十七年十二月七日局長ヨリ電報達ニ付、本館列品中(トンクリ)(モックリ)二品本日発ス」とある。これは同年5月にサウスケンジントンで開催された万国発明品博覧会(楽器の部)に出品するために送られたものである。同月27日に「森校長ヨリ土人楽器買却差間ナキヤトノ電報達シタリ」とあるように、返却されることなく現地で売却されたものと考えられる。これが現在いかなる機関に所蔵されているかについては定かではないが、表1および表4に記載のあるトンクリとムックリについては、現在所蔵されていないものとして取り扱う必要がある。

〔札幌農学校時代 標本室統合後〕

《8》『札幌農学校所属博物館標本採集日記』

1886年3月以降の収集資料については、『札幌農学校所属博物館標本採集日記』(以下『採集日記』と略記)という資料を利用することができる。これは、札幌農学校が北海道庁に移管され、農学校標本室が博物場に統合された1886年3月から1912年12月までの間に博物館で収集された資料がおおむね年次順に記載されているものである⁵¹。この『採集日記』には、類別番号という項目があり、個々の資料の管理番号として用いられている。《6》の1885年11月「博物場列品表」の各分類の資料点数と『採集日記』の各分類の最初(1886年3月以降)の類別番号とを比較すると、鳥類491→501、哺乳類72→72、魚類106→112、金鉾類70→71、燃鉾類50→51、参考品13→14となり、哺乳類の資料数減少についての疑問はあるものの、おおむね「博物場列品表」を基に運用されていたものと考えられる。ただし、この類別番号は1889年後半から記載されなくなり、混乱がみられるようになるので、注意が必要である。

『採集日記』に記載のあるアイヌ民族資料を表5にまとめた。表にみるように、1887年収集資料においても同じ類別番号をもつ資料が存在しており、この時期のアイヌ民族資料の管理の不徹底さがうかがわれる。また、1章で

も言及したように、この時期には活発なアイヌ民族資料収集活動は行われておらず、ほとんどが研究者・関係者からの寄贈資料となっている。以下、それぞれの受入れについて確認してゆくこととしたい。

《9》1887年 小寺甲子二による利尻・礼文島採集

札幌農学校所属博物館の助教であった小寺甲子二は、1887年7月31日に札幌農学校長代理の佐藤昌介に対し、「今般博物標品採集ノ為、北見國宗谷迄出張被命候ニ付、本日出発仕候⁵²」という届を提出している。この標本採集調査は、8月30日まで続けられ、昆虫類・考古資料を中心に258点が採集されたとされる⁵³。農学校の標本室と博物館が統合された直後でもあり、資料収集に力を入れていた農学校の収集活動の一環といえるが、小寺の復命書に記載のあるアイヌ民族資料は「刀ノ鞘 土中ヨリ掘出セシ品 一本」と「アイノ女子首飾玉 一品」の2点⁵⁴であり、収集資料の大部分は自然史資料ないしは考古資料である。アイヌ民族資料は偶然入手したものであろう。

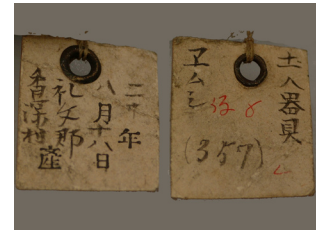


写真5

小寺の収集したアイヌ民族資料は、それぞれ『採集日記』類別番号357の「エムシ」と358「リクトンベ」に該当する。現存資料に「首飾玉」(リクトンベ)に該当するものは確認できないが、「刀ノ鞘」(エムシ)は資料番号【38512】【38513】の鞘になる。このうち、【38513】には写真5にみるラベルが付属しており、裏には「(357)」という記載がある。この番号は『採集日記』の類別番号と合致し、この時期には写真5のラベルと類別番号を利用して資料を管理していたものと考えられる。

現存資料のうち、写真5のラベルないし類似のラベルに類別番号と考えられる記載があるものを、表6にまとめた。《14》で後述するように類別番号による管理は変更されたため、ラベルの類別番号を隠す形で別のラベルが貼られているものが多く、類別番号を確認することができる資料が少ない。それゆえ、『採集日記』以前の管理体制を把握するために利用するには情報が乏しい。ただし、表6において、記載番号「252」以降の資料は、収集年代順に類別番号が振られていると評価できるので、これを表4-Bと対比させてみたい。

表4-A時点での所蔵資料が240点であることから、表4-Bの冒頭の小刀鞘(表4の種番131:以下同じ)に、仮に管理番号[241]を当てるとすると、管理番号[252]は酒柄杓一種(142)であり、表6の記載番号252の杓子【10483】に合致する。管理番号[259]は木盆(149)であり、表6の259盆【10593】に、管理番号[260]は木盆一種(150)であり、表6の260盆【10600】に、管理番号[262]は木鉢(152)であり、表6の盆【10609】に比定されるように、このラベルの類別番号の配列と表4-Bの配列とは合致するのである。しかし、表4-Cにまで目を向けると若干混乱がみられる。表4-C冒頭の木皿(165)に管理番号「275」を当てると、管理番号[288]は太刀雛形(178)となり、表6の記載番号288をもつ杓子【10487】と合致しない。この資料の収集情報は、後述するように混乱がみられるため、記載番号288のあるラベルは本来太刀雛形に付属していたもので、後に誤って付けられたと推測することはできるが、確たる根拠には欠ける。また、管理番号[325]はホカイ(215)となるが、表6の記載番号325は手拭掛【10499】となる。表4-Cホカイ(215)の前項に手拭掛(214)があること、表6の記載番号326が脚付行器【10013】であることから、ラベルの記載番号がずれたか、表4-Cの記載に混乱があったものと推測することができる。

表4-Cとの照合が完全に合致しないこと、および表4に今回仮に当てた管理番号=類別番号の記載がないことから、確実な照合とはいえないが、写真5ラベル裏の番号は、表4-B、つまり農商務省時代以降に利用されていた類別番号であると推測され、この配列を検討することで、表4-B・Cとの照合に利用できる可能性が高い。

《10》1887年 野沢俊次郎による寄贈

野沢俊次郎は札幌農学校五期生であり、後に札幌農学校の教員となる人物である。1887年時点では研究生であった。同年8月、根室の実家に帰省中の野沢に対して農学校から「帰札ノ際博物ヲ採集スベシ⁵⁵」という電報が出された。野沢はその指示に従い、人類学ニ関スル物、鳥類、魚類、昆虫、植物など761種1,728点の資料を採集し、「明治二十年春夏両期間採集品表⁵⁶」として報告をまとめている。「人類学ニ関スル物」とされた資料は、根室郡役所寄

送品であり、内訳は「土人髑髏 1」、「土言ペロ 1」、「土言カツミ 1」、「土言イタ 1」の4点である。

野沢の収集に関しては、野沢の後輩であった石川貞治による地質調査復命書にその様子を確認することができる。農学校七期生である石川貞治は、小寺や野沢と同様に1887年に佐藤昌介の命により、「根室札幌間地質視察及礦物採集」におもむいた。8月15日に根室に到着した石川は、翌16日「昆虫採集ノ為メ札幌ヨリ来着セシ学友野澤俊次郎君ト共ニ西山技師二伴ヒ旅宿ヲ發」し、根室地方の調査を行った。17日に「野沢君ト共ニ根室郡役所ニ至リ一室ニ陳列セル博物標本ヲ一見」したという。この後は翌日に牧場に同行したという記載があるのみで、野沢の行動をうかがうことはできないが、野沢の復命書に記載のある根室郡役所寄贈品は、8月17日に「一見」した博物標本に含まれていたものと考えてよかろう。『採集日記』では、1887年11月25日収集資料として類別番号357「カツミ 木柄杓」、358「ペラ」、359「フッチケ」の3点が野沢から寄贈されているが、実際の収集そのものは8月17日ないし、それ以降の近い時期であったものと推測される⁵⁷。

小寺・野沢・石川に加え、同時期に農学校の学生であった堀正太郎も道北地域に植物標本採集におもむいており、1887年には農学校としての標本採集活動が大々的に行われていた。しかし、野沢の収集活動が「昆虫採集ノ為メ」とされているように、アイヌ民族資料の収集を主眼としたものではないこと、野沢寄贈資料については野沢の収集意図ではなく、根室郡役所がなぜ収集していたのかについて検討する必要がある。

野沢の寄贈資料であることが確実に判明する資料を現存資料の中に見出すことはできないが、まないた【10610】は、その情報源は不明ながら現行管理台帳に「厚岸、1887年」とあること、「■年■月廿五日、■■産」というラベルが付属していること、「土名 イタ」という付箋が付属していることから、野沢の復命書の「イタ」に該当するものと考えられる。ただし、『採集日記』の359「フッチケ」とこれが同じものを指すのかについては、検討が必要である。

《11》「明治二十年 自四月至十二月 博物場採集品表」

小寺と野沢の収集年である1887年4月から12月の採集品増減表「博物場採集品表⁵⁸」によれば、アイヌ民族資料は繰越点数353点、採集2点、寄贈2点である。採集が小寺によるもの、寄贈が野沢によるものと考えられるが、『採集日記』の野沢の寄贈資料が3点であることと合致しない。また、小寺の収集資料は『採集日記』でも2点であるが、現存するエムシは【38512】【38513】の2点あり、現在確認できない「リクトンベ」を加えるならば、採集も3点とならなければならない。小寺の復命書でも「エムシ(刀ノ鞘)」は1本のみの採集とされているので、1887年8月16日という収集情報をもつエムシ【38512】【38513】のうち、写真5のラベルを持たない【38512】は、本来小寺の収集資料ではないのかもしれない⁵⁹。

また、繰越数が353点とあることも、『採集日記』の繰越数356点と合致しない。一つの考え方として、『採集日記』のアイヌ民族類別番号が357から開始されたことは、通し番号としての番号を示すものであり、『7』でみた万国発明品博覧会への出品による資料数の減少が反映されなかったのに対し、「博物場採集品表」は減少を反映した管理数の実態を示していると解釈することもできるだろうが、裏付けとする根拠には乏しい。

《12》1888年 R. ヒッチコックの依頼によるスミソニアン協会への送付

『採集日記』には、「スミソニヤ博物館ノ依頼ニヨリ特ニ購入シ、教師ストックブリージ帰国ノ際託送セルモノ」とある20種21点のアイヌ民族資料を確認することができる(表5)。この件については、すでに沖野(2000b)が関連資料を調査し、資料の収集や送付にかかわった人物、また送付の流れについて報告を行っている。本報告において、沖野の確認した資料に追加するものはないが、これまでにみた歴史的背景を踏まえるならば、沖野とは異なる考察が可能なのではないかと考えている。北大植物園・博物館に現存する資料とは直接関係はないが、補論として検討することとしたい。

スミソニアンの学芸員であった R. ヒッチコックは1888年の夏、北海道で調査を実施した。1875年の樺太千島交換条約によって札幌近郊の対雁に強制的に移住させられたサハリンアイヌ(ヒッチコックはツイシカリアイノ人と

呼んでいる)を訪問し、資料を収集しようと考えたが、当時流行していたコレラ、天然痘の影響を受け、サハリンアイヌが移住してしまったため、その目的を達成することができなかった。しかし、ヒッチコックは、「札幌農学校のH・佐藤氏の厚意によって、現在博物館に収蔵している貴重な標本の蒐集品を彼らから入手」したと述べている。このヒッチコックの記述は、沖野の調査の通り、現在スミソニアンに所蔵されている対雁アイヌ資料と、それに添付された当時の札幌農学校校長代理佐藤昌介の書簡に記載された資料目録、および『採集日記』にあるスミソニアンに送付した資料のすべてが合致することから裏付けられる。

ここで検討したいのは、札幌農学校および博物館がどのような意図を持って、この資料提供に関与したかである。沖野の見解をまとめると、以下のようになる。

(1) ヒッチコックの報告書にある「札幌農学校のH・佐藤」は、当時北海道庁の理事官であった佐藤秀顕である。佐藤は開拓使時代に札幌仮博物場を所管する物産課の課長であり、また1886年には札幌農学校の校長事務取扱の立場にあった。農学校の職務を離れたのちも農学校に強い影響力を持っていたために、ヒッチコックへの資料提供の便宜を図ることができる立場にあった。この佐藤秀顕の立場を考えるならば、スミソニアンに資料を送った佐藤昌介は単に事務的な役割を果たしたにすぎないのではないか。なお、ヒッチコックが「札幌農学校のH・佐藤」とした理由は、資料に添付された書簡の差出が同じ「Sato」であったことで混同した可能性と、佐藤秀顕の農学校への影響力が反映された結果による可能性の両者が考えられる。

(2) ヒッチコックの報告書や佐藤昌介の書簡には、札幌農学校所属博物館が収集に関与したことが確認されない⁶⁰にもかかわらず、『採集日記』に記録が残った理由は、博物館のスタッフであった小寺甲子二が収集に関与し、一時的に博物館で登録・保管したためである。

(3) 『採集日記』にみるように、スミソニアンに送られた資料は、開拓使時代に収集され、博物館に所蔵されていたサハリンアイヌの資料ではなく、石川定七という札幌の業者から購入したものである。あくまでも推測ではあるが、札幌農学校所属博物館が当時の対雁におけるコレラ・天然痘の流行を避け、札幌の業者から入手することを選択したものと考えられる。

(4) この件における札幌農学校所属博物館が果たした役割として重視すべきは、「近代的な『博物館施設』として(略)研究者や機関からの依頼に対して、資料の収集(購入)、登録、保管、提供、交換など現代の博物館活動に匹敵するような先駆的な仕事を(略)正式な機関として(アイヌ資料については本件1回のみであったが)手がけた」ことである。

以上の沖野の見解について検討してみたい。まず、ヒッチコックへの資料提供の便宜を図った中心人物が佐藤秀顕であり、佐藤昌介は事務的な役割を果たしたに過ぎないのではないかという点である。佐藤秀顕が当時北海道庁の有力者であり、札幌農学校へも大きな影響力を持っていたことは間違いない。しかし、ヒッチコックが訪問できなかった対雁のサハリンアイヌの資料を入手するために佐藤秀顕に働きかけ、佐藤が個人的にそれに応じたという図式が容易に成立するとは思えない。仮に佐藤秀顕が組織構造を無視するような形で提供を指示したとするならば、佐藤昌介が資料送付の書簡の中で資料交換を持ちかけたり、博物館側があえて『採集日記』に購入記録を残すといった農学校側の主体的な行動が説明できなくなる。また、佐藤秀顕の関与を重視するならば、この件に関する農学校所属博物館の役割は、近代的な博物館施設としての機能ではなく、行政機構の一組織としての役割としか評価できないだろう。この件については、再検討が必要である。

農学校所属博物館が海外に資料を送った事例は、他に《7》の万国発明品博覧会への出品がある。この事例では、「局長」からの電報達に基づいて、アイヌ民族資料を発送したことになる。この「局長」とは、1885年当時農学校を所管していた北海道事業管理局長の安田定則である。安田は、博覧会出品事務担当の事務官長⁴⁹でもあり、いずれの立場から指示が発せられたのか明確にはならないが、「局長」とある以上、博物館側は所管する北海道事業管理局からの指示であると認識していたのだろう。また、安田からの指示が博物館に直接出されたのか、農学校に出されたのかについても明らかとはならないが、博物館に売り払いの可否を確認しているのが農学校長の森源三であったことをみれば、農学校として対処したことは間違いない。ここにみる出品の手順は農学校の所管が北海道庁

に変わり、安田が佐藤秀顕に、森源三が佐藤昌介に変わっただけで、ヒッチコックに資料を送った際と同様である。この点からみて、単純に佐藤秀顕が農学校に強い影響力を持っていたために、ヒッチコックへの便宜を図ったと理解することはできない。

一方、ヒッチコック自身は博物館を訪問し、資料の調査も行っている。当時の札幌農学校所属博物館が資料交換などの対応を行いうる近代的な博物館施設であったとするならば、なぜヒッチコックはスミソニアンと農学校所属博物館との間で直接資料入手の打診を行わず、佐藤秀顕を介することになったのであろうか。この点については、1904年にセントルイス万博に出品する資料などを収集する目的で北海道を訪れたF. スターの事例が参考となる。スターは資料収集にあたって、J. バチェラーを協力者として見込んでいた。スターは函館から札幌に向かう途次に、偶然バチェラーと遭遇するが、彼の協力を得るためには北海道知事の許可を得る必要があった。また、スターが札幌農学校所属博物館の資料を調査し、写真撮影するにあたっては知事の承諾を得る必要があったのである⁶²。ヒッチコックとスターの来道には15年ほどの間があるが、ヒッチコックが依頼を行う上での公的な窓口は、スターと同様北海道庁であったと考えるべきであろう。このようにしてみれば、ヒッチコックが佐藤秀顕に依頼を行い、佐藤から農学校に指示が出されたというのは、公的なルートにのっとって行われたものであって、佐藤の影響力を見越した個人的な依頼ではないとみなされる。

次に、指示を受けた博物館側でどのような処理が行われたのかについて検討してみたい。沖野が確認したように、ヒッチコックに送られたアイヌ民族資料は、開拓使時代に収集されたサハリンアイヌのものではなく、新規に購入されたものであった。なぜ購入したのかについては、沖野と同様推測するしかないが、歴史的背景からみた仮説を提示することとしたい。

ヒッチコックが一貫して「ツイシカリアイノ人」と記述し、サハリンアイヌとは記述していないことから、ヒッチコックが北海道庁に依頼した内容は、「ツイシカリアイノ」の資料収集であったと考えられる。本報告書掲載目録からもわかるように、北大植物園・博物館所蔵のサハリンアイヌ資料には「対雁」という収集地を持つ資料はなく、「樺太(サハリン)」と記載があるのみである。これらの「樺太」収集資料が対雁での収集であることはほぼ間違いないが、当時の博物館スタッフがそのような歴史的背景を承知していたかどうかは疑わしい。開拓使の博物館時代のスタッフはすでに博物館におらず、また農商務省時代以降アイヌ民族資料への関心が薄れていたこともあり、ヒッチコックが求めている資料が博物館に所蔵されているサハリンアイヌの資料であることを把握できなかった可能性がある。それゆえ、「ツイシカリアイノ」の資料を送付するためには新規に入手する必要があると考えたのではないだろうか。

次に、資料入手にあたって、博物館スタッフが収集するのではなく、札幌の業者を利用したという点については、沖野が述べたように天然痘などの流行による危険を避けたということもあるかもしれないが、そもそも当時のスタッフがアイヌ民族資料を入手することができたかどうかについての検討も必要である。『採集日記』の収集資料をみれば、その大部分は動物や鉱物、古器物など対価を払って入手するのではなく、採集する資料になっている。寄贈資料は北海道庁や関係者からの寄贈であり、購入資料も魚商から魚類資料を購入するのみで、生活用品の収集を見出すことはできない。《10》《11》で収集されたアイヌ民族資料も発掘品であったり、根室郡役所が所蔵していたものを譲り受けたにすぎない。このようにしてみれば、札幌農学校所属博物館がヒッチコックの依頼を受けて収集するにあたり、石川定七という業者を介した理由は、収集する術を持っていなかったという考え方も成立しうるのではないだろうか。

最後に、ヒッチコックに送る目的で収集した資料を、なぜ一時的に博物館で登録したかという点である。これは、当時の博物館の状況を踏まえば容易に理解できる。《10》《11》でみたように、この時期の札幌農学校では、佐藤昌介の指示により、博物標本収集活動が盛んであった。ヒッチコックからの依頼を受けた佐藤昌介は、農学校所属博物館に所蔵していない資料を入手できる好機ととらえたに違いない。一方的な資料提供では、確実に入手できるとは限らないので、博物館資料として登録した上で送付し、「交換」することを求めたものと考えられる。スミソニアンとの資料交換においては、佐藤昌介が事務手続きを行ったのみと理解するのではなく、佐藤昌介の意向がうまく反映された対応と考えるべきである。

以上のように、現在スミソニアン協会に所蔵されている対雁アイヌ資料の送付にあたっては、ヒッチコックから正規の手順を踏み、北海道庁に依頼されたこと、北海道庁は関連資料を多く所蔵する札幌農学校所属博物館に対応を指示したこと、農学校では当時の博物館の状況に応じた形で対応したという理解をここではしておきたい。

《13》1890年 岡部方幾からの寄贈

『採集日記』には、1890年12月8日、石狩上川郡収集、岡部方幾寄贈というアイヌ民族資料が8点確認される(表5)。このうち、現時点で岡部寄贈という情報のある資料は3点である(表6)。この3点には「380」、「382」、「385」の類別番号が記載されており、欠落している数字をもつ資料が見出せるならば、岡部寄贈資料として位置付けられる可能性がある。

沖野(1999)の調査によれば、岡部は「東京人類学会雑誌」にアイヌ関係の研究報告を行っていた人物であり、1893年には札幌農学校関係者を中心とした札幌博物学会でも発表している。これらに対する収集意図は岡部の報告などを参考に読み解くことが必要である。

《14》民族資料整理カードによる19世紀収集資料の全体像把握

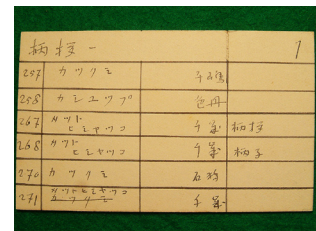
「札幌農学校一覧」において、1897年以降アイヌ民族資料が「本道『アイヌ』人ノ製造ニ関スル各種ノ諸器物」として収集される対象となったことについては、歴史的背景の中で確認した。この変化は1890年代初旬から半ばまでに実施された資料管理体制の刷新の結果によるものと考えられる。ここでは、その刷新の状況について概観するとともに、現存資料との照合方法について触れる。

1887年の小寺・野沢資料の段階から、『採集日記』の類別番号による記載には混乱が生じている。博物館で常に収集され続けていた鳥類標本においても、1890年ごろから類別番号の記載がみられなくなり、農商務省時代から行われていた資料管理体制が維持されなくなったとみられる。その理由は定かではないが、農商務省時代から博物館職員として勤務していた吉川昌則が1888年に北海道庁に異動した影響がその一因であろう。この混乱はしばらく続いた模様であるが、鳥類標本の場合は1894年11月12日採集のオオモズから「1315」という類別番号が与えられ、その後は継続されてゆく。この修正は、従来の類別番号を抹消し、すべての資料に対して新たな番号を振り直したものである⁶³。アイヌ民族資料においても同様の形で混乱を修正しようとしたことが確認される。

写真6は、北大植物園・博物館に保管されている整理カードである。写真のように器種毎のカードに、番号、品名、収集地、備考の記述がされ、カードに記載された番号は1から372までとなっている。このカードの特徴は、《1》、《4》とは異なり、個々の資料に管理番号が付与され、資料と管理記録とを一対一で対応させられることが可能で、明確に照合できるという点である。

この管理番号を基本として表7にカードの器種名、個々の品名、収集地、備考の情報をまとめた。カードの番号は写真7および写真8⁶⁴のラベルに記載されている番号と合致するので、確認されたものについては表の照合欄に資料番号を記載してある。この照合結果により、現在収集地不明の資料であっても、カードの情報を利用して収集地を把握することができる。ただし、現在の資料管理台帳の記載情報と齟齬する場合もあるため、情報の取り扱いについては慎重に行う必要がある(加藤2004)。

写真7のラベルは欠落により、特徴のある赤い紐のみが残されている場合があること、写真8のラベルは退色が進行していること、また後に行われた



387	カワクマ	子鼠
388	カシムツコ	包巾
389	カマシ	子鼠
390	カマシ	子鼠
391	カマシ	子鼠
392	カマシ	子鼠
393	カマシ	子鼠
394	カマシ	子鼠
395	カマシ	子鼠
396	カマシ	子鼠
397	カマシ	子鼠
398	カマシ	子鼠
399	カマシ	子鼠
400	カマシ	子鼠

写真6



写真7



写真8

整理によって上に別のラベルが貼られていることもあり、番号を判読できない例が多い。しかし、表7の照合結果からみて、これらのラベルが付与されている資料は、後述する一部の資料を除き、このカードに掲載されている資料であると判断できる。判読できないラベルを有する資料を表8にまとめた⁶⁵。

また、ラベル貼り付けの前後関係から、写真8のラベルよりも古い時代に利用されていたと評価できるラベルもある(写真9)。このラベルが付属する資料も、カードによる整理以前から所蔵されていた資料であると位置付けることができる⁶⁶。

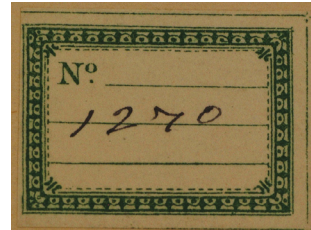


写真9

この管理体制の刷新が適正に行われたとするならば、その整理時点におけるすべてのアイヌ民族資料に新たに管理番号が付与されたことになる。つまり、表7にみる資料群が整理以前の収集資料の全容といえる。この整理が終了した時期は、鳥類標本と同様に『採集日記』に新規の番号で登録管理されるようになった時点以前と考えられる。表5にみるように、1907(明治40)年3月27日受入れ資料の類別番号が373から行われている。これは整理カードの末尾372につながるものと評価され、整理そのものが1907年以前に終了していたことを意味する。写真7のラベルの利用年代は、資料数が多く、採集年代情報の多い鳥類標本の状況から1897年ごろまで利用された後、別のラベルが利用されるようになっているので、民族資料の整理も19世紀中に終了していたものと推測される。よって、表7掲載資料については、すべて19世紀中の収集資料であると位置付けられる。

新たに付与された番号による管理は1914(大正3)年ごろまでは継続していたようである。表9は、『採集日記』の類別番号373以降の資料と現存資料との照合結果に加え、『採集日記』以降にも継続して利用されていた類別番号を持つ資料の一覧である。織具【10562】、織具【10943】はいずれも収集日情報はなく、「樺太」という情報のみを持つが、写真8ラベルの記載と『採集日記』の類別番号と寄贈日からみて、同日にイナウを寄贈した三宅勉もしくは宮城鉄夫という植物学者による一連の収集資料であることがわかる。1907年受入れ資料には写真8のラベルが付属し、類別番号が記載されているが、類別番号386以降の1914年収集という記録のある資料では写真5のラベルの裏面に記載がある⁶⁷。このことから、1914年ごろまでには写真8のラベルは利用されなくなったものと考えられるので、表8掲載の収集年代不明の資料群も1907年前後までに収集された資料であり、農学校移管後の収集資料の少なさからみて、ほとんどが開拓使から農商務省時代に収集された資料であると考えて大過ないだろう。

表9の類別番号から、北大植物園・博物館では1914年時点で400点を超えるアイヌ民族資料を所蔵していたことが把握できる。しかし、この管理体制も1917年の村田莊次郎の退職後から維持されなくなった模様で、1925年収集資料からは類別番号の記述が確認されなくなる。この後に行われた整理については不明な点が多いが、写真8のラベルの番号を隠すような形で別のラベルが貼られていることから、いずれかの時点で新たな整理が試みられたものとみられる。しかし、現存資料全体をみてもそれが体系的に行われたとは評価できず、逆に整理カードの番号を判読できなくしているために、本来得られるはずの情報が得られないという問題点が生じている。

《15》『札幌博物館案内』：1910年段階の展示資料

『札幌博物館案内』は、1910年に刊行された北大植物園・博物館の展示資料解説書である。ここでは、アイヌ民族資料は「人類学標本類」のなかの「アイヌ土俗品」として分類され、283点が展示されていたことが分かる。1910年段階では382点ほどのアイヌ民族資料が博物館に所蔵されていたので、所蔵資料のおよそ75%が展示されていたことになる。掲載資料を表10にまとめた。器種名とそのアイヌ名、収集地の記載が行われており、それぞれの分類ごとに番号が振られている。この番号は、写真10にみるラベルの番号と合致し、現在26点の資料に確認できるが、それ以外の資料については『札幌博物館案内』と現存資料の間で確実な照合を行うことは難しい。

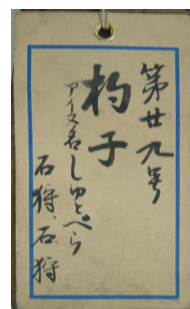


写真10

『札幌博物館案内』は《14》の資料管理と並行して作成されたものであり、基本的にカードの情報と同じものが記

載されていると推測される。しかし、柄杓【10487】では、《14》のカードと付属ラベルの照合により、「沙流」という収集情報が把握できるのに対し、『札幌博物館案内』に対応するラベルでは「石狩石狩」という記述になっている。この例のように、『札幌博物館案内』の記載にはやや正確さを欠く部分がある。柄杓【10487】の場合、現行台帳では『札幌博物館案内』に対応するラベルの情報に基づいて記載されているが、より古い情報である整理カードの情報を信頼すべきものであり、修正が必要である。この例に限らず、現行台帳の情報は『札幌博物館案内』の情報に依拠している場合が多いが、厳密な資料批判を行う上で、付属する情報が《14》のカードや、古い時代に利用されていたラベルと合致するかどうかまで検討を行う必要があることに留意しなければならない。

《16》「物品監守証書」：1930年代の購入、寄贈資料について

ここまで確認してきたように、北大植物園・博物館に所蔵される2,500点超のアイヌ民族資料のうち、19世紀中に受け入れられたものは400点程度であり、残りの2,000点以上は1925年以降の収集であると考えられる。資料管理台帳で1930年代から40年代収集という記録のあるものはおよそ200点、1950年代収集という記録のあるものはおよそ70点である。これに加え、収集年代不明ながらこの時代に収集されたとみなすことができる資料として、収集者の名前に名取武光・犬飼哲夫とある約50点、製作者名から1930年代に収集されたと把握できるおよそ500点を加えることができる。しかし、これらを総計しても1,000点に満たず、現存資料の1,000点以上が収集年代を把握することができない資料となる⁶⁸。これら収集年代不明資料の大部分は1930年代以降の収集資料と考えられるものの、資料管理台帳上で19世紀収集とされる資料と、ラベルの付属状況から19世紀収集と判断できるものを合計しても230点余りであり、150点以上の19世紀収集資料も収集年代不明資料群に含まれているものと推測される。個々の資料を《1》、《4》、《14》、《15》などの目録と照合することで推測することはできるが、1930年代以降に類似の資料が収集された可能性は排除できない。収集年代不明資料を19世紀収集、20世紀収集に選別するためには、20世紀収集資料の全容把握が必要である。

表11は今回新たにみつかった北大植物園・博物館の「物品監守証書」(1918年-1943年分)から、アイヌ民族資料に関する記述を抜き出したものである。1918年から20年にかけて朝鮮関係や南洋関係の資料の寄贈はあるが、アイヌ関係は1923年以降から受入れられている。

ここから読み取れる情報について確認しておく。第1にアイヌ民族資料は1923年および1925年の5点を除き、1,000点以上が1933年から1943年の間に受入れられている。これは名取武光・犬飼哲夫の活動と密接にかかわっていることをうかがわせる。第2に、納入された物品記録と現存資料との対比は困難であるが、鮭皮衣やスキー、彫刻狐など、所蔵資料の少ないものについては、ほぼ特定することはできる。これらは収集年代の記載がないので、この記録から収集年代の下限を把握することができる。また、一部の漆器類については詳細な記述があるので、資料によっては特定できる可能性が高い。第3に、資料納入の大部分を占める山川万次郎、佐藤富五郎、伊藤喜代三、川瀬勝次郎といった人物は、アイヌ民族資料に限らず考古資料や通常物品も納入しており、購入する際の仲介業者とみられる。その他の納入者は、山下三五郎や中村要吉、川上サノウク、司馬リキンテなどのアイヌのエカシ、馬場脩や稲生典太郎、米村喜男衛ら研究者の名前を確認することができる⁶⁹。ミサキ鋸【9811】、【10691】は、収集年代不明であるが寄贈者として「稲生典太郎」の名前がある。これらは、表11から1937年ないし1938年に寄贈されたものと考えることができる。また、収集者として「Baba」の記載のあるイナウ【34629】ほか9本も1935年に馬場脩から寄贈されたことが把握でき、収集年代の下限と位置付けることができる。以上のように、現存資料に付属する収集者、寄贈者の情報とこの物品監守証書の情報とを照合することで、受入れ年代を特定し、収集年代の下限を決定することが可能となる。第4に、購入された器種からは、特定の傾向を見出すことは難しい。名取による最初のアイヌ関係報告(犬飼・名取1934)が博物館所蔵資料についての解説であったことから、当初は網羅的な収集を意図していたとも考えられるが、逆に仲介業者からの働きかけに応じて購入をしていたとも考えられる。

1930年代以降に収集されたと推測される資料数が2,000点以上であるのに対し、この物品監守証書に記載されている資料数が1,000点余りであることから、証書が残らなかった、あるいは証書に記載されなかった資料が多く存

在することは間違いない。このことから、これのみでは収集年代把握のための材料としては不完全である。しかし、名取武光が研究対象とした花矢が現在 400 点強あるのに対し、物品監守証書では 120 点ほどしか確認できないことから、名取が研究材料として個人的に収集した資料がこの証書に記載されなかった可能性がある。器種ごとに照合してゆくというのも一つの検討方法であろう。

《17》1933 年『北海道帝国大学年鑑』

史料については、1 章で紹介したので割愛するが、1933 年にエゾオオカミ頭骨 2 点、近文アイヌ空知新次郎に製作を依頼した資料、静内での調査、八雲アイヌのエカシ椎久トイタレクを招聘して実施したイオマンテの資料などが収集されている。エゾオオカミ頭骨【23509】および【23510】は管理台帳上収集年代の記載がないが、これに比定される（沖野 2001）。また、八雲収集、椎久トイタレク製作という記録のあるイナウ【10178】も年次不明だが、おそらくこの記載に対応するものであろう。

《18》1936 年犬飼哲夫による北米博物館等への寄贈

犬飼哲夫は 1936 年アメリカ科学振興協会の大会において、アイヌに関する講演を行うために渡米した。この経緯については、犬飼の復命書（犬飼 1936）と報告（犬飼 1937）から把握することができる。

オレゴン大学ムーア教授の斡旋により、アメリカ西海岸において犬飼は 3 回の講演を行った。第 1 会場のワシントン大学の博物館で、犬飼が持参した 13 点のアイヌ民族資料と写真 10 数枚が展示された。第 2 回はオレゴン大学で行われ、講演後に犬飼はイナウと矢（復命書）、イナウとキナ（報告）を寄贈している。第 3 回はスタンフォード大学の臨海実験所で行われた。カリフォルニア大学バークレー校でも講演が予定されていたが、日程調整がつかず、イナウほか数点を寄贈して帰国している（復命書）。

犬飼が寄贈した資料は、現在ビショップ博物館に 3 点（手提げ〈樹皮布製〉、矢〈鎌欠〉、マキリ鞘）、パーク記念ワシントン州立博物館に 1 点（花矢）、オレゴン州立博物館・オレゴン大学美術館に 1 点（イクパスイ、Inukai, Moore とあり）、カリフォルニア大学ハースト人類学博物館に 4 点（莫産、イナウ、漆器、ムックリ）の計 9 点が確認されている⁷⁰。このうち、オレゴンの資料については、「博物館には先年東北帝国大学に教鞭を取ってゐた動物学のムーア教授の寄贈したイクパスイと写真一葉が唯一のアイヌ土俗品であつた」（報告）とされるので、これはムーアが持ち帰ったものだろう。同博物館には、犬飼の記述に対応するイナウや花莫産が所蔵されているので、これらが犬飼寄贈資料と推測される。

犬飼の記述と現存資料との間に整合性が取れない部分もあるが、各博物館の受入れ年次からみて、ここにあげた資料が犬飼の持参した資料であることは間違いない。小谷らの調査による資料写真をみる限り、アメリカの博物館に寄贈された資料群は北大植物園・博物館に所蔵されていた資料ではなく、犬飼が土産として持参した新しい時代の資料のようである。これらについては、開拓使・農商務省時代の目録類から削除する必要のない資料と考えられる。

《19》研究者による記録

上記以外に、北大植物園・博物館所蔵資料の収集年代を把握する方法として、外部の研究者による記述を利用することが挙げられる。とくに、訪問した年代が明確である場合に、記載されている資料を現存資料と照合することができれば、収集年代の下限と位置付けることができる。

1888 年に北海道を訪れた R. ヒッチコックは、農学校の博物館の資料として三弦の楽器、1 本の棍棒について言及している。これらが現存資料のいずれに該当するものであるかを明確にすることは難しいが、撮影した写真などを利用できれば明らかにすることができるかもしれない。

1904 年と 1909 年に博物館を訪問した F. スターはいくつかの写真を残している。Starr(1904) が引用した写真の墓標は、墓標【181】と合致する。このほかに引用されている資料写真と、現存資料とは合致しないが、《12》でみたようにスターが資料撮影を希望していること、この墓標を実際に撮影していることから、写真が現存していれば、

1904年以前の収集資料について把握できることが期待される。また、写真ではないものの、スターは博物館での資料調査についてフィールドノートに記述している。それを引用しよう。

1904年2月19日のノートでは、「木製の針箱、彫刻あり—石狩(Kem op)」、「木製鋳型—彫刻の装飾あり、2個からなる、獵銃弾作製用—日高(Kekut umbe shu)」、「葦製の方形盆—石狩」、「木製しゃもじ、装飾文あり—石狩」、「三弦琴、満州起源—千嶋(バリリア)」、「彫刻のある墓標—樺太(カリッカワ)」、「樺皮の湯沸かし用自在鉤」、「葦のござ編機(小石の重り付き)」、「樹皮製ほうき—石狩」、「熊祭りの道具を説明するケース(ヌサ、熊、酒桶、酒容器、パスイ。ノウサギの頭部。よくないが示唆に富む)、ござの色文様は茶、黒、無色で、幾何学文様。刺繍のパターンは地域的変異あり。シャガヌ?のものは特徴的。熊祭りの他に、ワシ送りなどもあり」。「以上の他に、模型か最近製作された木製棍棒がある。肉をたたくのに使用された。使用者は[不明]の付近⁷¹⁾」という記述がある。「木製鋳型」は首飾鋳形【10621】および【10622】に該当し、「墓標」は写真の残る墓標【181】であろう。「葦のござ編機」はござ織機【107】に、「樹皮製ほうき」は葡萄箒【9621】に該当するものと推測される。

1909年のノートでは博物館を訪問し、資料を観察した結果「量的には、私のコレクションよりそんなに多いわけではない。事実、私が所有していないものは、ほとんどない。これから旅行を続けるにつれ、注意しなければならないものが四つある。それは、a) 方形(普通)の藁の盆、b) 深い凹部をもつ、先が尖った凹部をもつスプーン、c) 上品な彫刻を施した木製ナイフと鞘、d) 空白⁷²⁾」という記述を行っている。スターの記述と照合できる資料は、収集年代が判明しているもののみであり、新たに収集年代を把握することはない。

この他には、犀川会(1933)に掲載されている写真資料、犬飼・名取(1934)、名取(1934a, 1934b, 1934c)による写真掲載の資料解説などを利用して、資料収集年次の下限の把握することができるが、これらの情報は名取の活動時期と重なりあうため、掲載資料が19世紀収集の資料であるのか、名取の活動に伴う収集資料であるのか判断することが難しい。しかし、収集年次の下限をわずかずつでも遡らせることで、表11掲載の物品監守証書の購入資料から除外することができるだろう。

このような照合を繰り返すことで、新たな知見が得られるものと期待している。北大植物園・博物館では、所蔵資料が引用されている論文などを収集し、現存資料との照合作業を進めている。利用にあたってはこれらの照合結果についても提供することとしているので、参考にしていただきたい。

今後の展望—むすびにかえて—

管見に入った史料・目録類を紹介しつつ、現存資料との照合を試みたが、《14》の整理カード、《8》の『採集日記』の一部、《15》『札幌博物館案内』の一部のみが確実な照合といえるものであって、厳密な対応が可能となる史料・目録類は多くはない。また、照合の鍵となる付属ラベル類が欠落している例が多く、全容把握には至らなかった。これは、文字資料に依拠する検討方法の限界といわざるを得ない。しかし、1882年、84年の移管資料や1890年代の整理カード、1930年代の物品監守証書などの各年代の収集資料の概要について把握できる史料を効果的に利用することで、北大植物園・博物館のアイヌ民族資料の収集(集積)の状況を復元することができるだろう。そのためには、現存資料そのものが持つ特徴と文字情報から得られる資料名、収集地情報との対比といった物質文化研究からの側面や、アイヌ名称と物質文化資料との照合といった言語学的側面からの検討を進めてゆくことで、より精度の高い照合が可能となるものと期待できる。本報告が、様々な研究分野からのアプローチに有益な基礎的情報となれば幸甚である。

謝辞

本報告をまとめるにあたっては、北海道立文書館、北海道大学附属図書館北方資料室、北海道大学文書館、東京国立博物館、市立函館博物館、函館市北方民族資料館ほか多くの関係機関の協力を得た。また、北海道開拓記念館の三浦泰之氏からは、東京国立博物館所蔵史料の調査にあたって、助言・協力を得た。深く感謝申し上げる。最後に、130年の歴史を有する北大植物園・博物館は、その歴史の大部分において少人数・小規模で運営されてきた。目録

が完成されたのは、必ずしも良好な環境ではない中でたゆまず資料を保存し、記録を管理し続けてきた職員の功績があったからこそである。北大植物園・博物館にかかわらず、博物館関係者の努力があるからこそ、われわれが資料を利用できるということについて、謝意を表したい。

〔補記〕

本報告脱稿後、スミソニアン協会アーカイブ (Smithsonian Institution Archive) において、史料調査を実施した。Record Unit 201[Assistant Secretary in charge of the United States National Museum, Correspondence and Memoranda, 1875-1902]: Box 16[Department of Arts and Industries, Section of Textiles (prior to 1890, the Section of Textile Industries)]: Folder10-13 には、ヒッチコックの日本滞在時の書簡が多数保存されていた。中でも Folder12 には、本報告で言及した「ツイシカリアイノ」の資料収集についての記載が確認された。

ヒッチコックが 1888 年 9 月 16 日に Goode 宛に出した書簡によれば、ヒッチコックは入手できなかった「ツイシカリアイノ」の資料を入手するために、札幌の高官である「Mr. Sato Hidiyaki」の協力を取り付け、収集してほしいもののリストを送付したこと、また、札幌農学校のストックブリッジにも同様の協力要請を行ったことを報告している。あわせて、札幌農学校の博物館の館長には、「Yezo Pottery」といくつかのアイヌの文献、模型などと、スミソニアン協会の土器とを交換してほしい旨を依頼したことを報告している。この書簡の存在により、以下の点が整理される

- (1) ヒッチコックが収集対象としていた「ツイシカリアイノ」資料は、農学校所属博物館が所蔵していたサハリンアイヌ資料ではなく、当時の「ツイシカリアイノ」が利用していたものであった。
- (2) 資料収集にあたって、ヒッチコックが佐藤秀顕に依頼した理由は、札幌農学校に影響力を持っていたためではなく、当時の対雁アイヌへの行政上の影響力によるものであると考えられる。
- (3) ヒッチコックは、札幌農学校所属博物館に対して「ツイシカリアイノ」資料ではなく、別のアイヌ資料について交換の打診を行っていた。
- (4) 依頼を受けた佐藤秀顕、札幌農学校、ストックブリッジは、個別に対処するのではなく協力して対処することとしたものと推測され、佐藤秀顕から農学校所属博物館に指示が出され、博物館は札幌の業者を通じて「ツイシカリアイノ」資料を購入し、それをストックブリッジに託してスミソニアン協会に送付することとなった。

この書簡の存在により、本報告の当該部分の見解については若干の修正が必要であるが、主題に大きな影響を及ぼすものではないこと、および全面的に修正する時間的余裕がないため、補記するにとどめた。なお、今回の調査において、National Museum of Natural History Department of Anthropology の資料台帳の調査も実施し、札幌農学校所属博物館から送られた対雁アイヌ資料との交換でスミソニアン協会から送られた資料の情報についても収集した。この件については、別の機会に報告することとしたい。

(引用・参考文献)

八田三郎.1911:『熊』,東京,富山房

八田三郎.1926:アイヌの生活と博物館のアイヌ品陳列棚,『啓明会第十八回講演集』

北海道大学植物園.2008:『北大植物園資料目録』,6 アイヌ民族資料目録,札幌,北海道大学植物園

ヒッチコック R. / 北構保男 (訳).1985:『アイヌ人とその文化 — 明治中期のアイヌの村から —』(世界の民族誌

1) 東京,六興出版:原著は Romyn Hitchcock 1892「The Ancient Pit-dwellers of Yezo」および「The Ainos of Yezo, Japan」,いずれも『The Report of National Museum for 1890』,Smithsonian Institution. United States National Museum

犬飼哲夫.1936:犬飼哲夫教授米国各地視察復命報告書,北海道帝国大学『教授海外視察復命報告書』6

犬飼哲夫.1937:米国西部に於けるアイヌに関する講演経過,『民族学研究』3(2):425-427

犬飼哲夫・名取武光.1934:北大附属博物館所蔵アイヌ土俗品解説(1),『ドルメン』3(2):31-39

加藤克.2002:史料紹介『札幌農学校所属博物館標本採集日記』(1),『北大植物園研究紀要』2:69-84

- 加藤克 .2003 : 史料紹介『札幌農学校所属博物館標本採集日記』(2),『北大植物園研究紀要』3:63-80
- 加藤克 .2004 : 札幌農学校所属博物館のアイヌ民族資料,『北大植物園研究紀要』4:1-54.
- 加藤克 .2006 : 史料紹介『札幌農学校所属博物館標本採集日記』(3),『北大植物園研究紀要』6:37-57
- 加藤克 .2007 : 史料紹介『札幌農学校所属博物館標本採集日記』(4),『北大植物園研究紀要』7:35-55
- 小谷凱宣 .1994 :『フレデリック・スターのアイヌ研究資料の民族学的研究』,文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- 小谷凱宣・荻原真子(編).2004 :『海外アイヌ・コレクション総目録』,文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書
- クライナー ヨーゼフ (Kreiner Josef).1987 : ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクションの歴史と現状,『国立民族学博物館研究報告別冊』5:417-453
- 三浦泰之 .2000 : 明治初期の地方博覧会と開拓使 - 開拓使 - 北海道はどのように「見られていた」のか?-,『北海道開拓記念館研究紀要』28:153-178.
- 三浦泰之 .2001 : ウィーン万国博覧会と開拓使・北海道,『北海道開拓記念館研究紀要』29:177-206.
- 村田庄次郎(編).1910 :『札幌博物館案内』札幌,維新堂
- 難波琢雄 .1987 : 千島アイヌの鳥皮衣(チールル)について,『民具マンスリー』20(1):11-16
- 名取武光 .1933 : 故篠岡亮一氏の蒐集せる北海道先史的遺物の紹介 - 主として石鐮の形態と一土偶に就て -,『考古学雑誌』23(3):143-149
- 名取武光 .1934a : 北大附属博物館所蔵アイヌ土俗品解説(2),『ドルメン』3(4):13-25
- 名取武光 .1934b : 北大附属博物館所蔵アイヌ土俗品解説(3),『ドルメン』3(7):59-65
- 名取武光 .1934c : 北大附属博物館所蔵アイヌ土俗品解説(4),『ドルメン』3(11):19-26
- 沖野慎二 .1999 : 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料(上),『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』5: 1-19
- 沖野慎二 .2000a : 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料(中),『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』6: 1-17
- 沖野慎二 .2000b : 合衆国国立自然史博物館所蔵サハリン・アイヌ資料の背景について - 札幌農学校はいかにしてかわったか -,『北海道東海大学紀要・人文社会科学系』13 : 1 - 16
- 沖野慎二 .2001 : 北海道大学農学部博物館のアイヌ民族資料(下),『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』7: 1-19
- 犀川会 .1933 :『北海道原始文化要覧』東京,民族工藝研究會
- 佐々木利和 .1997 : 東京国立博物館のアイヌ民族資料(上),『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』3:1-21
- 佐々木利和 .1998 : 東京国立博物館のアイヌ民族資料(下),『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』4:1-
- 関秀夫 .2005 :『博物館の誕生』東京,岩波書店
- 関秀志 .1975 : 明治初期～中期における北海道の博物館 - 札幌を中心に -,『北海道開拓記念館研究年報』4: 47-65.
- 関秀志 .1991 : 明治期における北海道の博物館(2),『北海道開拓記念館調査報告』30:91-118.
- 関秀志・中田幹雄・千代肇 .1990 : 明治期における北海道の博物館(1),『北海道開拓記念館調査報告』29:113-139.
- Starr Frederick.1904 :『The Ainu Group At the Saint Louis Exposition』,Chicago, The Open Court Publishing Company
- 東京国立博物館(編).1971 :『東京国立博物館百年史』,東京,東京国立博物館
- 東京国立博物館(編).1992 :『東京国立博物館図版目録 アイヌ民族資料編』,東京,東京美術

- (1) 2007 年現在の正式名称は北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園。2001 年の改組以降、名称上は「博物館」というものは存在しないが、後述するように 120 年以上の間、札幌博物館、札幌農学校所属博物館、北海道大学農学部博物館として活動してきたことで「博物館」という名称は広く認知されており、ここでは通称として用いることとしたい。
- (2) 2 章でみるように、製作者や寄贈者などの情報がある資料は多い。これらの情報を総合的に検討すれば、所蔵資料の半数近くは収集年代を把握することができる。
- (3) 開拓使による設置から札幌農学校への移管までの経緯については、関 (1975,1991) に詳しい。また、北海道の博物館成立・発達史については関・中田・千代 (1990) を参照した。
- (4) 開拓使「教師報文録」巻、札幌学院大学図書館所蔵。
- (5) 北海道立文書館簿書 5495、「明治五年開拓使公文録 八 外事之部」。
- (6) 開拓使「明治八年 布令録」、「分局章程、物産局分課章程」。
- (7) 大蔵省編刊『開拓使事業報告』。
- (8) 前掲注 (7)『開拓使事業報告』。
- (9) 北海道立文書館簿書 7263、農商務省北海道事業管理局「札幌博物館、札幌牧羊場、札幌育種場引継書類」。
- (10) 前掲注 (7)『開拓使事業報告』。
- (11) 前掲注 (9)「札幌博物館、札幌牧羊場、札幌育種場引継書類」。
- (12) 前掲注 (9)「札幌博物館、札幌牧羊場、札幌育種場引継書類」。
- (13) 河野常吉『博物 - 式』(稿本、犬飼哲夫旧蔵)「諮問會議事録」。ここでは関 (1991) から引用した。本史料にみる田中芳男の指示については、東京国立博物館所蔵資料「列品録 明治 17 年」(館資 375)を確認することができる。
- (14) 『北海道帝国大学一覧』自大正十一年至大正十二年。
- (15) 前掲注 (13)「諮問會議事録」。
- (16) なお、田中は「札幌博物館ノ目的ニ付意見」(前掲注 (13)「列品録 明治 17 年」)において「動植礦物并固有ノ人工物ヲ蒐集シ全道ノ物品ヲ一目瞭然タラシムルコト」および「開拓殖民ノ為裨益アル物品(略)ヲ陳列シ陸水二産増殖ノ模範タラシムルコト」の二部体制という考え方を持っており、いわば勸業部とそれ以外の部門という思想を持っていたものと考えられる。
- (17) 北海道立文書館簿書 2661、函館支庁勸業係「函館仮博物館並公園地書類 従明治十一年一月至十二月 十二年マテ」。
- (18) 旧稿(加藤 2004)において、東京仮博物館のアイヌ民族資料が札幌仮博物館に移管された可能性について示唆したが、これが誤りであったことについては 2 章で述べる。
- (19) 北海道立文書館簿書 5816、開拓使東京出張所「開拓使公文録 本庁 明治八年」。
- (20) 北海道立文書館簿書 2385、開拓使東京出張所勸業課 第一回内国勸業博覧会出品取扱係「内国勸業博覧会書類 諸目録類 明治九年・十年」。
- (21) 前掲注 (20)「内国勸業博覧会書類 諸目録類 明治九年・十年」。
- (22) 前掲注 (13)「列品録 明治 17 年」。
- (23) 北海道大学文書館所蔵札幌農学校簿書 194、札幌農学校「本局上申稟議録 明治十七年自一月至十二月」。
- (24) 前掲注 (13)「列品録 明治 17 年」によれば、博物館との交換で入手した勸業部の資料は 234 種である。
- (25) 前掲注 (23)「本局上申稟議録 明治十七年自一月至十二月」。
- (26) 北海道大学文書館所蔵札幌農学校簿書 234、札幌博物館「日誌 明治十八年」。
- (27) 年表作成にあたっては沖野 (1999) を参考とした。
- (28) 北海道大学文書館所蔵札幌農学校簿書 123、札幌農学校「十五年六月開拓使ヨリ農務局ヘ引継目録」。なお、「アノイ頂骨 巻」とあり、発掘品としての所蔵は 1 点確認される。
- (29) 前掲注 (26)「日誌 明治十八年」。
- (30) 北海道大学文書館所蔵札幌農学校簿書 228、札幌農学校「局長上申本局稟議録 明治十八年一月以降」。ただし、この列品表では、同年の「博物館日誌」に記載のある古器物採集旅行で得られたはずの古器物類の増加が全くみられないことから、記載情報の精度には疑念がある。
- (31) 『北海道帝国大学一覧』自大正十一年至大正十二年。
- (32) 北大植物園・博物館に所蔵されている管理目録に記載がある。
- (33) 1904 年に博物館を訪問したフレデリック・スターは、「種類は少なく、数も少なく、並べ方もよくない」(小谷 1994)と書き残している。1910 年の『札幌博物館案内』によれば 283 点が展示されていたこと、またこの『札幌博物館案内』に合わせて付与されたラベルが現在も資料に付属している(2 章参照)ことから、1910 年に何らかの展示換えが行われたと推察される。
- (34) 八田 (1926)。
- (35) 北海道大学文書館所蔵札幌農学校簿書 896、「二十四年公裁録 三冊之内 物品・地所・家屋及分析 雑件」。
- (36) 寄贈者については沖野 (2000a) に詳しい。
- (37) 北海道大学文書館所蔵札幌農学校簿書 405、「二十三年公文録 四冊ノ内 校員・生徒・雑件」。
- (38) 史料上確認することはできないが、開拓使時代から小寺・野沢の採集まで、博物館関係者が収集した多数の昆虫標本が現在全く所蔵されていないことは、昆虫学資料として農学校本校に移管されたものと推測される。この件については、現在の昆虫体系学教室と連携して調査を行う予定である。
- (39) 前掲注 (9)「札幌博物館、札幌牧羊場、札幌育種場引継書類」。
- (40) 沖野の対応結果は個別の資料番号が記載されているわけではないため、報告のみではその可否を評価することができないことが惜しまれる。本報告書掲載目録の収集情報と、沖野報告の収集情報および資料名とを照合して確認されたい。本報告では沖野からの私信に基づき、妥当であると評価した。
- (41) 前掲注 (13)「列品録 明治 17 年」。
- (42) ただし、現在北海道事業管理局からの引継資料と位置付けられているものが 51 点であるのに対し、札幌博物館が送付した資料が 41 点であることとの整合性が取れないので、さらなる検討が必要である。照合できない資料には、後述する札幌博物館由来のラベルや、「明治十六年十月 北海道管理局引継品」のラベルが付属していないので、混入の可能性もある。現時点で判明している点としては、丸木船 (25791) は北海道アイヌ資料となっているが、札幌博物館の作成した書類によれば、樺太アイヌの資料であり、修正の必要があるかと考えられる。また、札幌博物館から送られた 2 点の矢筒には、6 本ずつ矢が付属していたという記載がある。現時点における東京国立博物館所蔵資料では、4 本 (25800)、5 本 (25798) しか付属しておらず、合計 3 本欠落している。これは受理次第不明の矢 3 本(無番)に該当するのではないかと推測される。
- (43) 前掲注 (13)「列品録 明治 17 年」。
- (44) 資料の保存管理は、函館市北方民族資料館で行われている。
- (45) 東京国立博物館所蔵「列品録 明治 15 年」(館資 371)。
- (46) 前掲注 (23)「本局上申稟議録 明治十七年自一月至十二月」。
- (47) この 10 点の増加が 1883 年 12 月に行われたのか、84 年 7 月以降に行われたのかについて検討してみたい。84 年 6 月段階のアイヌ民族

- 資料点数が327点であった《4》のに対し、85年11月段階での資料点数が340点であり、かつ84年12月から85年11月までに増加していない《6》。これらの史料を信頼すれば、84年7月から11月までの間に資料が13点増加したことが分かる。3点の増加分の整合性が取れないことから、《4》《5》《6》の資料数増加の記録が厳密なものではないとはいえない。ただし、現存資料の収集年代には83年12月収集という資料がないのに対し、84年8月収集という記録のあるものが7点確認されることから、《4》の(C)と《5》の間にある10点分は農学校移管後、84年7月以降の収集によるものと考えて差支えないだろう。
- (48) 前掲注(30)「局長上申本局稟議録 明治十八年一月以降」。
- (49) 沖野(1999)は同年採集資料を、推定を含め10点を挙げているが、ここでは資料管理台帳上収集年代の記録のある資料のみとした。
- (50) 前掲注(26)「日誌 明治十八年」。
- (51) 詳細は沖野(1999)参照。加藤(2002,2003,2006,2007)が全体について翻刻中である。
- (52) 北海道大学文書館所蔵札幌農学校簿書329、札幌農学校「校員諸願届書綴 明治二十年一月以降」。
- (53) 北海道大学文書館所蔵札幌農学校簿書319、札幌農学校「復命書編冊」。
- (54) 小寺は「アイヌ骨格 但不完全ノ者 一組」も発掘している。この資料は考古学調査の過程で発見されたものらしい。現在【36570】という管理番号で人類学資料として保存している。
- (55) 北海道大学文書館所蔵札幌農学校簿書301、「明治二十年札幌農学校公文録第一 六冊ノ内 校員異動・校員出張・雇教師・典礼 自一月七日至十二月二十一日」。
- (56) 前掲注(53)「復命書編冊」。
- (57) 野沢が譲り受けた人骨は、資料番号【36573】であり、人類学資料として管理している。
- (58) 前掲注(53)「復命書編冊」。
- (59) 両者が入手した人骨は、史伝部ではなく動物類として管理されていたようである。
- (60) ヒッチコックの報告書(北構1985)には「博物館」の蒐集品を入手したという記述があり、また佐藤昌介の書簡にも博物館に交換で送付してほしいという記述があるので、博物館が関与していたことは明らかである。
- (61) 『海外博覧会本邦参同史料(第3輯)』(永山定富編)、「一六、倫敦万国発明品博覧会」。
- (62) 小谷(1994)。
- (63) この件は、「札幌農学校所属博物館における標本管理の実態からみた近代博物館史」(科学研究費課題番号18720159)として現在調査中の成果による。
- (64) このラベルは、『採集日記』の類別番号が記載されている部分に貼り付けられていることが多く、1887年以前まで利用されていた類別番号を清算しようとした形跡がみられる。
- (65) 表8掲載資料が、表7の整理カード記載資料のいずれに該当するかについては旧稿(加藤2004)を参照されたい。
- (66) 収集年代不明資料のうち、写真9のラベルのみが付属する資料は、切台【9617】、織具【10563】である。収集年代が判明するものも1878年、1884年収集資料であることから、この2点の資料も開拓使時代、もしくは農商務省時代の収集資料であると考えてよい。
- (67) 写真5のラベルも農商務省時代から農学校初期に利用されていたラベルであるが、1910年代から一時的に再利用されるようになる。このラベルの付属する資料も開拓使時代から農学校初期の収集資料と評価することは可能だが、例外もあるため慎重に検討する必要がある。
- (68) 沖野は、1930年以降の収集資料総数を1,002点とするが、その根拠は不明である。
- (69) 寄贈者については、沖野(2001)に詳しい。現存資料で収集者・寄贈者として確認することができない「篠岡秀」という人物は、名取(1933)が紹介した篠岡亮一の夫人である篠岡秀子であると推測される。1933年時点で篠岡旧蔵品は遺族他関係者によって保管されることになっていたが、それらを購入したものであろう。名取は、小樽市を中心として収集された考古資料についてのみ言及しているため、篠岡旧蔵のアイヌ民族資料がどのような過程で収集されていたのかについてはよくわからない。遼星北斗との交流が知られることから、アイヌ民族資料も小樽市を中心とした後志地方で入手したものと推測されるが、現存資料と対応させることができないため現時点では明らかとならない。
- (70) 小谷・荻原(2004)による。
- (71) 小谷(1994)。
- (72) 小谷(1994)。

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金(2005-2007年度) 基盤研究(B)「北海道内の主要アイヌ資料の再検討」(研究代表者 佐々木史郎・小谷凱宣、課題番号17320142)の成果として報告書に掲載したものを一部修正して転載したものである。報告書では、北大植物園・博物館以外の博物館所蔵資料についても調査・報告がなされているが、『北大植物園資料目録』6アイヌ民族資料目録として北大植物園・博物館所蔵資料のみの目録を刊行するにあたって、資料の概要説明にあたる本稿も報告書から独立させることが必要であると考え、転載することとした。

表1 博物館陳列品現在表 土人部

番号	品名	点数	評価額	品名	点数	評価額
1	銚	5	3 円 50 銭	56	エナヲ一種	1 30 銭
2	銚ノ類 マーレ	3	2 円 10 銭	57	煙管	2 30 銭
3	銚ノ類 ラスマ	2	1 円 40 銭	58	煙草入	3 3 円
4	屋根察幣 (ママ)	3	30 銭	59	子供背負棒	1 7 銭
5	ワナノ類 アマツポ	1	1 円	60	杓子	2 30 銭
6	全 雛形	1	30 銭	61	ヒ	2 20 銭
7	毛皮頭巾	3	6 円	62	灰搔	1 5 銭
8	矢筒	2	1 円	63	矢筒	1 50 銭
9	雪車引皮	1	3 円	64	燭臺	1 5 銭
10	鹿毛衣	2	10 円	65	樺皮蠟燭	3 15 銭
11	襦袢	1	1 円	66	十能	1 10 銭
12	小刀 マキリ鞘	1	30 銭	67	木鉢	1 15 銭
13	杵臼	1	50 銭	68	子背負	1 1 円 20 銭
14	船堀道具柄	1	10 銭	69	食ベラ	2 10 銭
15	ナタノ類 タシロ	1	70 銭	70	ホクチ入	1 30 銭
16	背負縄	1	70 銭	71	糸巻	3 30 銭
17	鉢巻	1	50 銭	72	盆	1 75 銭
18	丸木舟	2	2 円	73	ヘラ	1 5 銭
19	海船	2	3 円	74	臼	1 10 銭
20	モリノ類 ハナレ	2	2 円	75	杵	1 10 銭
21	毛衣	1	10 円	76	木箕	1 25 銭
22	厚子衣	2	10 円	77	全 雛形	1 10 銭
23	女ノ子帯	2	30 円	78	葡萄箒	1 35 銭
24	帯	2	50 銭	79	エナヲ大	1 20 銭
25	テンキ艸 ホトンエスベ	1	50 銭	80	全 中	3 30 銭
26	全 帽	1	1 円 25 銭	81	全 小	3 6 銭
27	全 碁器	1 対	1 円	82	籠	4 2 円
28	全 茶臺	1	20 銭	83	ハナレ雛形	1 25 銭
29	全 三徳	1	50 銭	84	矢	22 1 円 10 銭
30	全 胴乱	1	45 銭	85	鹿笛	1 30 銭
31	テンキ草	1 把	10 銭	86	木弓	3 60 銭
32	帽子	1	1 円	87	アマツポ	2 2 円
33	楽器 トンクリ	1	2 円	88	機織具	1 式 5 円
34	竹琴	1	25 銭	89	厚子切地	1 巻 1 円 50 銭
35	マキリ	1	50 銭	90	全 上	全 1 円 50 銭
36	厚子織具	1 式	2 円 50 銭	91	紐織機械	1 2 円
37	幣束	1	10 銭	92	胴乱	1 1 円
38	撚子	2	30 銭	93	脚胖	1 1 円
39	火揉道具	1 組	50 銭	94	背負縄	2 70 銭
40	煙管	2	30 銭	95	刑杖	5 3 円 50 銭
41	鬚拳	2	60 銭	96	カンジキ	1 1 円 50 銭
42	木鉢	1	30 銭	97	小ダシ	5 1 円 50 銭
43	柄撚	2	50 銭	98	草鞋	1 50 銭
44	脚胖	1	60 銭	99	子背負	1 1 円 20 銭
45	鮭ケリ	1	1 円	100	足袋	1 20 銭
46	漁具類	3 組	60 銭	101	厚子衣	4 20 円
47	船堀具 エケウシ	2	2 円	102	帯	3 90 銭
48	船繕道具	1	2 円	103	木綿縫取衣	1 3 円
49	弓矢	1 組	3 円	104	鉢巻	2 60 銭
50	銚雛形	1	50 銭	105	頭巾	1 1 円
51	角マキリ	1	1 円 50 銭	106	烏籠	1 50 銭
52	筆立	1	1 円 50 銭	107	蔵雛形	1 50 銭
53	マキリ	5	2 円 50 銭	108	杵	1 10 銭
54	茶台	1	75 銭	109	臼	1 10 銭
55	タシロ	4	2 円 80 銭	110	樺皮皿	2 30 銭

品名	点数	評価額	品名	点数	評価額
111 丸木舟	4	4 円	119 全小屋組 全	1	5 円
112 剥舟	6	9 円	120 キナ	21	21 円
113 樺太雪車	2	4 円	121 草盆	1	50 銭
114 全 引皮共	1	5 円	122 角盆	2	1 円 25 銭
115 剥舟	2	3 円	123 上等盆	1	2 円 50 銭
116 倉雛形	1	5 円	124 上等マキリ鞘	1	2 円
117 熊檻全	1	1 円	125 鮭網 ヤスヤ	2	40 銭
118 家雛形	1	8 円	126 莞蘭筵	3	1 円 80 銭

整理番号及び資料数、評価額は漢数字をアラビア数字に修正してある。品名が「マーレ」などのアイヌ名の場合、「鉋ノ類」の様に朱書で補記してあるが、本表では書き分けていない。

表2 送付目録 札幌博物館

番号	品名	個数	ラベル番号	旧ラベル	東博資料番号
蝦夷之部					
1	イナヲ	1 個			
2	タシロ	1 個			25733
3	アマツボ	1 組		1	25805
4	鉢巻	1 筋	4 号		25668
5	背負縄	1 線			25697
6	小供背負棒	1 本			
7	白杵	1 組			25723
8	イケウレ	1 個			25905
9	漁具	1 個			25768
10	小網	1 個			25787
11	セレンボ	1 挺			25922
12	マキリ	1 挺			25680
13	食匙 (ホウケンペラ)	1 個	13 号		25845
14	匙 (カシユップ)	1 個	14 号		25844
15	杓子	1 個	15 号		25716
16	木ノ皮皿	1 枚			25842
17	匙	1 個			
18	盆	1 枚	18 号		25861
19	木皮蠟燭	1 丁		2	25727
20	イナヲ	1 個			
21	帯	1 本			25658
22	刑杖	1 本			25736
23	アツシ	1 枚			25866
24	煙草入	1 個		1	25827
25	小イナヲ	1 個			
26	矢筒 矢共	矢筒 1 個 矢 6 本	26 号	1	25800
27	弓	1 挺			25812
28	背負皮	1 筋			
29	船 附属櫂四本	1 個			25788
30	丸木船	1 個			25790
31	糸巻	1 個		3	28607
32	矢筒 矢共 但矢六本	1 組			25798
33	柄杓	1 本	33 号		25719
樺太之部					
34	帽	1 個			25887
35	女帯 マキリ共	1 筋	35 号		25741
36	船 附属櫂二本	1 個			25789
37	雪車 附属品共	1 組			25869
38	丸木船	1 個	38 号		25791
39	漁具	1 本			25765
40	全	1 本			25904
41	全	1 本			25766

目録のうち、「露国之部」13点、「支那之部」2点、「外ニ古器物 数点」の記述は省略した。「東博資料番号」は、東京国立博物館(1992)に掲載されているもののうち、該当すると考えられるものの資料番号を記述した。

「ラベル番号」欄は、現存資料に目録と対応する番号記載のラベルが付属していることを示す。「旧ラベル」の数字は、北大植物園・博物館所蔵資料と共通のラベル(写真1・2・3)が付属する資料であることを示す。

表3 東京国立博物館所蔵資料と同じラベルを持つ北大植物園・博物館所蔵資料

資料番号	標本名	収集日	収集地	旧ラベル
125	犬ぞり	1879.	樺太	1
187	子負棒		千歳	1
9502	奉酒箸		北海道東北部	3
9587	奉酒箸			2
9628	モッタ	1879.	樺太	2
9694	槍	1879.	樺太	2
10474	盃台	1879.	石狩	2
10493	柄杓			3
10494	織具		樺太	3
10560	アシカルペ	1882.11.	樺太	2
10568	織具	1882.11.	樺太	2
10572	織具	1882.11.	樺太	2
10582	織具		沙流	2
10601	盆			1
10604	盆		八雲 * ¹	3
10605	箕	1879.	石狩	2
10615	杵	1879.	石狩	1
10616	臼	1879.	石狩	1
10624	スキー			2
10685	弓			1
10802	イナウ	1878.	樺太	1
10917	火箸		石狩	1
32537	矧舟			1
38518	織具			3

旧ラベルの数字は、本文写真の番号のラベルが付属することを示す。

*1: 資料管理台帳では寄贈者「松田武策」とあるが、これは1930年代の人物であり、古いラベルの付属状況と合致しない。この資料番号の前後に、ラベル付属のない「八雲、松田武策」という資料が存在することから、情報が混乱しているものと考えられる。

表 4 札幌博物館陳列品目録

(A) 明治 16 年 7 月現在旧土人用具						
	品名	方言	数			
1	幣束	エナヲ	1	54	テンキ草製帽子	1
2	礼帽之一種	チヤバアンベ	1	55	木皮帽子	1
3	幣束之一種	エナヲ	2	56	脚半	半足
4	全	全	3	57	厚子切地	アット 2 巻
5	屋根幣束	全	3	58	足袋	ケレンブ 1
6	大幣束	全	1	59	木綿縫取衣	チカラカラベ 1
7	竹琴	トンクリ	2	60	頭巾	コウシ 1
8	三味線	モツクリ	1	61	鹿皮衣	1
9	小刀鞘	マキリシリカ	2	62	毛衣	1
10	小刀	マキリ	3	63	脚半	ホス 1
11	角小刀	マキリ	1	64	帯	クーチ 1
12	小刀	マキリ	2	65	テンキ草製三徳	1
13	山刀	タシロ	3	66	テンキ草	1
14	上等小刀	マキリ	1	67	テンキ草製碁器	2
15	杵	ユタニ	1	68	厚子織具	カヲルンベ 1
16	白	ニシヤウ	1	69	全一種	全 1
17	大白		1	70	鮭皮靴	1 足
18	同杵		1	71	舟鑿道具	エケウレ 1
19	テンキ草製茶台		1	72	舟繕道具	チイキマキリ 1
20	杓子	カシユツフ	2	73	筆立	1
21	火道具	ニイカラキシヤ	1	74	子供背負棒	1
22	煙管	セエレンホ	2	75	蓆	サラネブ 9
23	煙草入	タンハコビヨンフ	1	76	テンキ草製胴乱	1
24	髭揚		2	77	海驢背負皮	トララツケ 1
25	木鉢	マトキ	1	78	刑杖	シユト 4
26	全 一種	全	1	79	草靴	リトケリ (ママ) 1 足
27	柄杓	カツクム	1	80	鳥籠	1
28	茶台		1	81	樺太雪車	クラレ 2
29	喰匙	ホウケンヘラ	2	82	船繕具	2
30	燭台	シネユニ	1	83	櫂	1
31	樺皮蠟燭	チノエタ	2	84	桴一種	3
32	灰搔	アベキライ	1	85	桴	アツトスヘラ 2
33	水取	ワツカケツブ	1	86	全種	全 1
34	喰事匙	ベラ	2	87	雪車引皮	1
35	火口入	カアラバス	1	88	子背負	エヲマア 1
36	糸巻	ヌイトシエブ	2	89	丸木舟雛形	3
37	盆	ヲツチケ	2	90	海舟雛形	1
38	木箕	ムエ	1	91	蔵雛形	1
39	全 雛形	全	1	92	大剥舟雛形	モチツフ 3
40	葡萄箒	ムウーネイブ	1	93	全一種	モシンブ 2
41	俎代用樺皮皿	フニス	1	94	倉之雛形	1
42	座	キナ	21	95	熊鷹雛形	1
43	草盆	キヲツチケ	1	96	家之雛形	1
44	莞蒲筵		3	97	小屋組雛形	2
45	上等盆	全	1	98	剥舟雛形	チブ 2
46	煙草入	タハンコヒヨンブ	1	99	丸木舟雛形	1
47	山刀	タシロ	1	100	銚	2
48	毛皮頭巾	コウシ	1	101	銚ノ一種	マーレ 2
49	頭巾		1	102	全 一種	ヨーマ 1
50	鉢巻	マタンブシ	2	103	ブシ矢雛形	アマンホ (ママ) 1
51	厚子衣	ヲシケアツトシ	5	104	銚ノ一種雛形	ハナレ 2
52	女ノ帯	グーチ	1 筋	105	弓	クーウ 1
53	帯	クーチ	3	106	銚雛形	2
				107	銚ハナレ雛形	1
				108	矢	アマツホ 23

109	鹿笛		1
110	木弓	クーウ	3
111	鋤矢		3
112	矢付矢筒		1
113	釣漁具類		2組
114	矢筒		3
115	背負縄		2
116	鋤一種	マーレ	2
117	箴		2
118	熊祭供幣束一種	トシヨクニ	1
119	全	エナヲケマ	1
120	全	キケバラセ	1
121	全	タクサツコロエナヲ	1
122	全	エツキシヤバヲニ	1
123	全	エナヲキケ	1
124	全	イモカエナヲ	1
125	全	チユホロカケツブ	1
126	全	ハシナヲ	1
127	全	無名	1
128	熊縄	ワレンフ	1
129		チーキマキリ	1
130	火打道具		1
合 130 種			240

(B) 明治16年2月ヨリ12月迄旧土人具採集調

	品名	方言	数
131	小刀鞘	マキリシリカ	1
132	同一種	全	1
133	山刀鞘	タシロ	1
134	刀	エムシ	1
135	俎	シユケイタ	1
136	盃	ニマ	1
137	全一種	全	1
138	全一種	全	1
139	木片口	エトムツブ	1
140	木ノ鉢	サケネセツブ	1
141	酒柄杓	カツクミ	1
142	全一種	サケニセツブ	1
143	杓子	カシユツブ	1
144	樺柄杓	タツカツクミ	1
145	喰子匙	ベラ	1
146	全一種		1
147	全一種		1
148	全一種		1
149	全木盆(ママ)	ヲツチケ	1
150	全一種		1
151	木鉢	アツンキ	1
152	木鉢	ニハツチ	1
153	木片口	エトノブ	1
154	全一種		1
155	木鉢	ツウキ	1
156	髭揚	エクバスイ	1
157	酒柄杓	サケヒシヤク	1
158	全一種		1
159	矢筒	チカユツブ	1
160	熊耳飾環	マラトニンカリ	1

161	女子耳環	ニンカリ	1
162	女子手環	テクンカネ	1
163	熊骨箸	イベバシユイ	1
164	木皿	ニマ	1
34 種			34

(C) 明治17年1月ヨリ同6月迄旧土人器具採集調

	品名	方言	数
165	木皿	ニマ	1
166	刀ノ帶取	エムサアチ	1
167	全一種	全	1
168	箴	ヲサ	1
169	腰板	イシトモフ	1
170	機織具	カマカツブ	1
171	綾取	ベカウニ	1
172	杼ノ一種	グツベラ	1
173	帶織箴	クツチヨ	1
174	子供首飾	リクトンベ	1
175	礼帽ノ一種	シヤバアンベ	1
176	子背負縄	ボンタラ	1
177	篋	シトベラ	1
178	太刀雛形	タンネイコロ	1
179	刀ノ雛形	エムシイコロ	1
180	全一種	全	1
181	箭筒雛形	イカユヒコロ	1
182	全一種	全	1
183	箴	ヲサ	1
184	キナ袋	カリヒンキ	1
185	緯糸	アブンカ	1
186	首飾鑄形	リクトンヘ形	1
187	全一種	全	1
188	穂摘具	イチャビバ	1
189	塩入	キナバツバ	1
190	糸巻	ニトサエブ	1
191	同種	全	1
192	釣床	シンタ	1
193	鷲鉤	カバチリアツブ	1
194	盃台	タカエシヤラ	1
195	樺皮手桶	カツクム	1
196	全一種	全	1
197	全柄杓	全	1
198	樺皮柄杓	ヒシヤクコ	1
199	全一種	全	1
200	背負縄	チタルンベエツブ	1
201	キナ袋	チユヲマチタルンベ	1
202	カンジキ		1
203	胴乱	キナカロブ	1
204	キナ編具	エテセン	1
205	糸縷具	カンケ	1
206	舟ノ雛形	チップ	1
207	鴨掛ケ具	カシンタ	1
208	火燵一袋 火打共	ヒウーチ	1
209	切台	イタミ(ママ)	1
210	枕	セニヌイベ	1
211	俎	ヤーリ	1
212	自在鉤	シユワチ	1

213	簾	シコツテシ	1
214	全	手拭掛	1
215	全	ホカイ	1
216	全		1
217		イヲベチタルベ	1
53 種			53 点
合計			217 種 327 点

目録中の漢数字は、品名以外アラビア数字に修正した。方言欄には、「全」を示す可能性のある「一」という記載があるが、ここでは省略した。

表5 『採集日記』中のアイヌ民族資料

採集日	受入日	分類	類別 番号	品名	地名	原由 / 備考 / 価格
20.8.18		土器	357	エムシ	礼文郡トンナイ	助教授小寺甲子氏採集
20.8.18		土器	358	リクトンベ	礼文郡トンナイ	助教授小寺甲子氏採集
		土人用具	357	カツクミ 木柄杓		野沢俊次郎氏採集、寄贈
20.11.25		アイヌ什器	358	ペラ		野沢俊次郎氏寄贈
20.11.25		アイヌ什器	359	ヲツチケ		全
21.10.19				乾魚		札幌石川定七ヨリ購入 スミソニヤ博物館ノ依頼ニヨ リ特ニ購入シ教師ストックブ リージ帰国ノ際託送セルモノ
21.10.19				百合根ノ餅		全
21.10.19				木製煙管		全
21.10.19				柄杓		全
21.10.19				搦子		全
21.10.19				匙		全
21.10.19				魚盆		全
21.10.19				飯椀		全
21.10.19				木盤		全
21.10.19				イコロ		全
21.10.19				厚子衣（男用）		弐円五拾銭
21.10.19				全（女用）		弐円五拾銭
21.10.19				全帯		弐拾五銭
21.10.19				全前掛		三拾七銭
21.10.19				全脚半		弐拾銭
21.10.19				矢筒		七拾五銭
21.10.19				矢 二本		拾七銭
21.10.19				弓		弐拾五銭
21.10.19				厚子織機		壹円五拾銭
21.10.19				鉾 海獣挿簞用		拾五銭
23.12.8				弓	石狩上川郡	岡部方幾寄贈
23.12.8				矢	全	全
23.12.8				マキリ鞆	全	全
23.12.8				糸巻	全	全
23.12.8				イクイタンキ	全	全
23.12.8				イクバシュー	全	全
23.12.8				火打袋	全	全
23.12.8				厚子前掛	全	全
26.12.20		什器		アイヌ墓標	石狩上川	札幌新戸部稲造氏寄贈 (ママ)
40.3.27		アイヌ用具	373	鉾ノ柄	樺太	
40.3.27		アイヌ用具	374	切れ地	〃	
40.3.27		アイヌ用具	375	機織具	〃	
40.3.27		アイヌ用具	376	梭	〃	
40.3.27		アイヌ用具	377	篋	〃	
40.3.27		アイヌ用具	378	糸巻	〃	
40.3.27		アイヌ用具	379	蓆	〃	
40.3.27		アイヌ用具	380	エナウ	〃	
40.3.27		アイヌ用具	381	エナウ	〃	
40.3.27		アイヌ用具	382	エナウ	〃	

『採集日記』中では備考、原由、価格は別項目だが、便宜上一項目にまとめた。採集日、受入日は「明治 年、月、日」である。厚子衣（男用）以降は、記載頁が変わるため、前項にみる「スミソニヤ」以降の記載がなくなっているが、一連の資料群であると考えられる。

表6 『採集日記』以前の類別番号記載のあるラベルが付属する資料

資料番号	資料名	収集日	記載番号	備考
10808	イナウ	1878.	1	
10605	箕	1879.	11	
10179	ヌサ	1882.10	12	
10179	ヌサ	1882.10	13	
10179	ヌサ	1882.10	14	
10179	ヌサ	1882.10	15	構成するそれぞれのイナウに付属
10179	ヌサ	1882.10	17	
10180	ヌサ	1882.	18	
10179	ヌサ	1882.10	20	
10806	イナウ	1878.	20	
10474	盃台	1879.	55	
19	木綿衣	1884.	59	
10545	木皮燭	1879.	61	
110	倉庫	1879.	181	
10483	杓子	1883.10.05	252	表 4-B:142 に合致するか
10593	盆	1883.10.05	259	表 4-B:149 に合致するか
10600	盆	1883.10.05	260	表 4-B:150 に合致するか
10609	盆	1883.10.05	262	表 4-B:152 に合致するか
10607	片口	1883.10.05	263	表 4-B:153 に合致するか
10472	柄杓	1883.10.05	267	表 4-B:157 に合致するか
164	ヘラ	1883.10.05	268	表 4-B:158 に合致するか
10594	盆	1883.10.05	274	表 4-B:164 に合致するか
10487	杓子		288	
10499	手拭掛	1884.06.10	325	表 4-C:214 カ
10013	脚付行器	1884.06.10	326	表 4-C:215 カ
194	柄杓	1884.08.23	335	
38513	鞆	1887.08.16	357	
10080	奉酒箸	1890.12.08	380	岡部寄贈
38529	矢	1890.12.08	382	岡部寄贈
154	椀	1890.12.08	385	岡部寄贈
33827	墓標?	1890.12.08	389	『採集日記』では確認できない資料

表7 民族資料整理カード 一覧

カード No.	カード名	記載 番号	品名	収集地	備考	照合
107	家屋模型 チセ	1	家屋模型	日高沙流		111
107	家屋模型 チセ	2	家屋 組方模型	石狩石狩		
110	テウレツプチセ	3	鳥籠	胆振千歳		
111	ペウレツプチセ	4	熊欄模型	日高沙流		
106	プー	5	貯食庫模型	樺太		
106	プー	6		日高沙流		
107	家屋模型 チセ	7	家屋 組方模型	樺太	チリカリチセ 又 アリカリチセ	
28	糸巻 ケムヲップ	8	糸巻	石狩上川		
28	糸巻 ケムヲップ	9		日高沙流		
68	糸巻 カサエツプ	10	糸巻	日高沙流		
68	糸巻 カサエツプ	11		日高 静内		
28	糸巻 ケムヲップ	12		日高 静内		
82	帯 クウト	13	婦女用帯 クウト	日高沙流		
84	厚子衣 メアンベ	16	厚子衣	樺太		
76	脚半 ホシ	17	脚半	石狩石狩		
13	ケルヲップ	18	足袋	石狩石狩		
33	胴乱 キナカロツプ	19	キナカロツプ 胴乱	石狩千歳		10443
57	火器 ピウチヲップ	20	火口入	石狩石狩		
58	火器 ピウチ	21	火打入	天塩天塩		
65	耳環 ノチウトンウ シ、ニンカリ	22	耳輪 通常男女用	日高沙流		
70	手環 (テクンカネ)	23	手環 女子用	日高沙流		
109	首飾 (リクトンベ)	24	リクトンベ	沙流		
108	首飾鋳型 (リクト ンベ、シユ)	25	首飾鋳型	日高沙流		
108	首飾鋳型 (リクト ンベ、シユ)	26		日高沙流		
90	蓑入 タンバコヲップ	27	煙草入	樺太		
90	蓑入 タンバコヲップ	28		日高沙流		
57	火器 ピウチヲップ	29	火打袋	石狩上川		
59	火器 パシヲツプ、 ピウチ	30	火打道具	石狩千歳		
59	火器 パシヲツプ、 ピウチ	31	ホクチレ	石狩千歳		
87	背負棒 アイアイヨウンベ	32	小児背負棒	石狩石狩		
113	背負縄 エヨマチタルベ	33	小児ヲ背負縄	石狩石狩		
69	釣床 シンタ	34	小児釣床	日高沙流		181
114	楽器 モツクリ	35	竹琴	日高静内		
89	背負縄 (チレツプ ナヲシケツプ)	36	背負縄	石狩千歳		
89	背負縄 (チレツプ ナヲシケツプ)	37	タライベ	石狩石狩		
80	ニカップアツトシ	38	厚子衣	石狩石狩		
126	頭巾 コンチ	39	頭巾	樺太		09467* ¹
83	鉢巻 タマタンブシ	40	鉢巻	日高厚別		9473* ²
77	カアバラシ	41	木綿縫取衣	日高厚別		
82	帯 クウト	42	クウト	石狩石狩		
102	帽子 シヤバアンベ 2	44	礼帽	石狩石狩		

カード No.	カード名	記載 番号	品名	収集地	備考	照合
15	胴乱 チラーレ又カ ヒウチヲツプ	45		根室厚岸		
15	胴乱 チラーレ又カ ヒウチヲツプ	46	胴乱	日高新冠		
77	カアバラシ	47		石狩千歳		
2	手袋 テクンベ	48	手袋	石狩千歳		
76	脚半 ホシ	49		石狩千歳		
115	糸縄 (ウトキアツ)	50	糸縄	石狩千歳		
115	糸縄 (ウトキアツ)	51	ムリリ	石狩千歳		
88	背負縄 (タラ)	52	ポンタラ 小児背負棒	日高沙流		
88	背負縄 (タラ)	53	ヌマラシタラ	千島シヤコタ ン		
43	厚子袋 (ヲシケアツ トシ)	54	厚子衣	樺太		
43	厚子袋 (ヲシケアツ トシ)	55	厚子衣	樺太		
78	アツシポンバケ 前 掛け	56		日高沙流		
126	頭巾 コンチ	57		樺太		9466* ³
43	厚子袋 (ヲシケアツ トシ)	58		樺太		
82	帯 クウト	59	シラコンテプヘチリン クウト	樺太		
79	鳥皮衣 チカップウル	60		千嶋色丹		
82	帯 クウト	62	タント、クツツ	樺太		
88	背負縄 (タラ)	63	全	樺太		
80	ニカップアツトシ	64				
126	頭巾 コンチ	65	毛皮頭巾	樺太		
75	獣皮衣	66		樺太		
123	刑杖 シュト	67		有珠紋別		
123	刑杖 シュト	68		有珠紋別		
123	刑杖 シュト	69		有珠紋別		
123	刑杖 シュト	70		有珠紋別		
19	杵 ユタニー	71	杵 大	石狩石狩		10614
19	杵 ユタニー	72	杵 小	石狩石狩		10615
20	白 ニシヨウ	73	白 大	石狩石狩		10613
20	白 ニシヨウ	74	白 小	石狩石狩		10616
21	箕 模型 ムイ	75	箕 大	石狩		10605
21	箕 模型 ムイ	76	箕 小	石狩		
121	煙管 セーレンボ	77		樺太		
121	煙管 セーレンボ	78		樺太		
121	煙管 セーレンボ	79		釧路厚岸		
112	矢筒 ユカエツプ	80	ポニユカエツプ	日高沙流		
112	矢筒 ユカエツプ	81	ポニユカエツプ	日高沙流		
12	太刀 イコロ	82	ボンイコロ	日高沙流		
12	太刀 イコロ	83	チクニボンイコロ	日高沙流		
12	太刀 イコロ	84	チクニボンイコロ	日高沙流		
23	穂摘具 エチャビベ	85		日高沙流		
16	葡萄箒 ソヌフブ	86		石狩		
76	脚半 ホシ	87	ケツプカツプホシ	樺太		
31	長靴 トントケレン	88	トントケレン	千嶋色丹		
125	船繕ヒ具	89	ヒリセシケカネ	樺太		
125	船繕ヒ具	90	ホネケム	樺太		
125	船繕ヒ具	91	モチタ 船鑿具	樺太		
125	船繕ヒ具	92	ブクル	樺太		

カード No.	カード名	記載 番号	品名	収集地	備考	照合
125	船繕ヒ具	93	コンチプキ マキリ 船矧具	樺太		
140	小刀鞘	94	カリンバシリカ	沙流		
140	小刀鞘	95	ホネサヤ	沙流		
140	小刀鞘	96	マキリシリカ	石狩		
139	小刀 マキリ	97	マキリエヒリカ	樺太		
139	小刀 マキリ	98	マキリ	沙流		
139	小刀 マキリ	99	マキリ	石狩		18342
139	小刀 マキリ	100	エヒリカ	樺太		
139	小刀 マキリ	101	マキリ	石狩		
140	小刀鞘	102	マキリシリカ	沙流		
140	小刀鞘	103	マキリシリカ	上川		
139	小刀 マキリ	104	マキリ	択捉		
139	小刀 マキリ	105	マキリ	樺太		
141	タシロ	106		沙流		
141	タシロ	107		沙流		
141	タシロ	108		石狩		
141	タシロ	109		沙流		9477
141	タシロ	110		石狩		
31	長靴 トントケレン	111	シツケリ 草靴	石狩		
31	長靴 トントケレン	112	ケリ 鮭魚皮製	樺太		9458
30	雪靴 カンジキ	113	テシマ	石狩		
46	草盆 チユヲチケ	114	チユヲチケ	石狩		
45	盆 ヲツケ	115		様似		10601
45	盆 ヲツケ	116		様似		
45	盆 ヲツケ	117		択捉		
122	茶盆	118	タカイサラ	石狩		10474
120	筆立	119	イブセヲツプ	択捉		
101	帽子 1	120	カサ	樺太		
17	髭揚簪	121	エクバシー	上川		10080
8	喰匙 ペラ	122	カムイポネバシー	沙流		
8	喰匙 ペラ	123		沙流		
8	喰匙 ペラ	124		沙流		
8	喰匙 ペラ	125	ハウケンペラ	石狩		
8	喰匙 ペラ	126	ペラ	沙流		
8	喰匙 ペラ	127	ペラ	沙流		
8	喰匙 ペラ	128	ペラ	沙流		
8	喰匙 ペラ	129	ハウケンペラ	沙流		
8	喰匙 ペラ	130	ペラバシー	沙流		
8	喰匙 ペラ	131		札幌		
27	手拭掛ケ アヲケベ	132		沙流		10499* ³
124	三絃琴	133	バラリヤ	色丹		
124	三絃琴	134		色丹		
81		135	アツトシカルベ	色丹		
138	鹿呼笛	136		千歳		
136	矢 1	137	アイ	沙流		
136	矢 1	138		沙流		
136	矢 1	139		沙流		
136	矢 1	140		沙流		
136	矢 1	141		沙流		
136	矢 1	142		沙流		11139* ⁴
136	矢 1	143		沙流		38529* ⁵
134	矢筒	144	イカユ	鶴川		
134	矢筒	145	ヲボマシユヲツプ 矢 二付	樺太		

カード No.	カード名	記載 番号	品名	収集地	備考	照合
134	矢筒	146	イカユ	沙流		
61	機具	147	アフンカ	沙流		
26	火箸	148	アベパシー	沙流		
136	矢 1	149		沙流		
14	柄杓 木皮	150		沙流		10493* ⁶
14	柄杓 木皮	151		沙流		10490* ⁷
136	矢 1	152		沙流		
18	物干シ具	153	ヤルベシヤンゲブ	沙流		
34	提袋	154	キナサラネツプ			
129	櫛木	155	チホロニナツプ	沙流		
136	矢 1	156				
136	矢 1	157				
136	矢 1	158				
26	火箸	159		沙流		
14	柄杓 木皮	160		沙流		33007* ⁸
134	矢筒	161		鵲川		
136	矢 1	162		鵲川		
136	矢 1	163		鵲川		
134	矢筒	164		石狩		
134	矢筒	165		釧路尺別		
5	弓	166	グウチ	釧路尺別		
5	弓	167	グウチ	樺太		
5	弓	168	グウチ	上川		
5	弓	169	グウチ	鵲川		
5	弓	170	クワレク	沙流		
5	弓	171	クワレク	沙流		
137	鷲釣具	172	カバチクアツプ	千歳		
131	銚	173	マーレ	千歳		
131	銚	174	ヨーマ	樺太		
131	銚	175	マーレ	樺太		
131	銚	176	ラスマ	樺太		
131	銚	177	ラスマ	樺太		
131	銚	178	ハナレ	樺太		
131	銚	179	マアレ	樺太		
131	銚	180		樺太		
131	銚	181		樺太		
131	銚	182	マアレ	樺太		
131	銚	183	マアレ	樺太		
131	銚	184	銚	樺太		
131	銚	185		樺太		
131	銚	186	柄	樺太		
132	銚	187		樺太		
6	釣具	188				
6	釣具	189				
130	鴨掛具	190	カシンタ	千歳		
52	獨木舟模型	191		樺太		
52	獨木舟模型	192		樺太		
52	獨木舟模型	193		日高静内		
49	矧舟模型	194	チップ			32536
50	木皮船模型	195	ヤチップ	千歳		
74	海船模型	196				
52	獨木舟模型	197		千歳		
49	矧舟模型	198	チップ			
48	船模型	199	モチップ			
47	犬橈模型	200	クワレ	樺太		
48	船模型	201	モチップ			

カード No.	カード名	記載 番号	品名	収集地	備考	照合
49	矧舟模型	202	チップ 大			
63	幣束	203	イナウ			10808* ⁹
63	幣束	204	イナウ			10806* ⁹
63	幣束	205	イナウ			
63	幣束	206	イナウ			
63	幣束	207	イナウ			
63	幣束	208	イナウ		上棟式二用ユ	10756* ⁹
63	幣束	209	エナウ		上棟式二用ユ	
63	幣束	210	イナウ 大			10809* ⁹
63	幣束	211			上棟式二用ユ	10765* ⁹
54	機具 箴	212	カマカツブ	沙流		
9	機具 綾取	213	ヘカウニ	沙流		
10	機具 腰板	214	エシモトツ	沙流		
54	機具 箴	215	カマカツブ	鷗川		
53	機具 篋	216	クウーベラ			
11	機具 杼	217	アットシカルベ	樺太		
116	機具 榎	220	アフンカ	樺太		
116	機具 榎	221	アフンカ	樺太		
54	機具 箴	222		樺太		
54	機具 箴	223				
54	機具 箴	224				
54	機具 箴	225		樺太		
54	機具 箴	225	カマカツブ	樺太		
11	機具 杼	226	グウチヨリ	沙流		
55	機具 縷具	227	カニチ	千歳		
56	厚子織具一式	228	カヲルンベ	沙流		
56	厚子織具一式	229	カヲルンベ	沙流		
53	機具 篋	230	クウーベラ	沙流		
29	厚子切れ地	231	アット	沙流		
29	厚子切れ地	232	アット	沙流		
117	俎	233	シユケニマ	沙流		
91	木鉢	234	ニマ	千歳		
91	木鉢	235	ニマ	千歳		33003* ¹⁰
91	木鉢	236	ニマ	千歳		
129	櫛木	237	チホロニナツブ	釧路白糖		
86	本鉢	238	チボンニナボン	樺太		
86	本鉢	239	ニバツチ	沙流		10609
86	本鉢	240	ニバツチ	沙流		
85	木製片口	241	エトノブ	沙流		10607
95	盆	242	ヲツツケ	沙流		10593
86	本鉢	243	エタンギ	樺太		
86	本鉢	244	チボンニナボン	沙流		
86	本鉢	245	チボンニナボン	千歳		10594
91	木鉢	246	ニマ	沙流	盆形	10600
24	塩入	247	キナパツパ	沙流		
117	俎	248	チクニカツブニマ		木	
51	切り台	249	イタタニー	千歳		
94	木皮皿	250	フニス	石狩	俎代用	
93	椀	251	エベセイ	厚岸		
91	木鉢	252	チクニボンニマ	厚岸	盆形	
93	椀	253	ニイタンキ	上川		
92	木皮鍋	254	チクニカツブニハトシ	千歳		10589
128	自在鍵	255	シユツチ	千歳		
117	俎	256	チボンニマ	厚岸		
39	柄杓	257	カツクミ	千嶋		
39	柄杓	258	カシュツブ	色丹		

カード No.	カード名	記載 番号	品名	収集地	備考	照合
40	水汲	261	ハツカケツブ	石狩		
127	灰搔キ	262	アベサンカラキライ	石狩		
60	火燧具 木製	263	ニイカラキシヤ	石狩		
67	燭台	264	シネユニ	石狩		
25	蠟燭 木皮製	265	チノエダ	千歳		10545
25	蠟燭 木皮製	266	チノエダ			
39	柄杓	267	タツトヒシヤツコ	千歳	柄杓	
39	柄杓	268	タツトヒシヤツコ	千歳	柄子	194
40	水汲	269	タツラサラネブ	沙流		10586
39	柄杓	270	カツクミ	石狩		
39	柄杓	271	タツトヒシヤツコ	千歳	カツクミ抹消	10915
39	柄杓	272	クツトヒシヤツコ	千歳		193
104	手桶	273	ニハツシ	千歳		10477
104	手桶	274	ニハツシ	千歳		10590
39	柄杓	275		沙流		
39	柄杓	276	ビシヤク	沙流		10495
72	杓子	277	ニカシユツブ	石狩		
72	杓子	278	ニカシユツブ	沙流		
72	杓子	279	ニカシユツブ	石狩		
39	柄杓	280	イヌウシコツトカシツ プ	千歳		
72	杓子	281	シタベラ	千嶋		
32	編製物入	282	■一チカムチヲシユケ サラネブ	色丹		
37	篋	283	シユトベラ	沙流		10487* ¹¹
96	(三徳) 紙入	284	テンキ	択捉	紙用用 (ママ)	
96	(三徳) 紙入	285			胴乱用	
119	茶台	286	タカサラ	択捉		
102	帽子 シヤバアンベ 2	287	シヤバアンヘ	択捉		10465
73	碁器 (塩入レ)	288	シヲシギ			10463
97	テンキ草	289	カツンカ	択捉		9869
3	蕨 (編製物入)	290	シナ サラネブ			
3	蕨 (編製物入)	291	シナ サラネブ			
3	蕨 (編製物入)	292	シナ サラネブ			
3	蕨 (編製物入)	293	サラネブ			10997
3	蕨 (編製物入)	294	ニベシ サラネブ			
3	蕨 (編製物入)	295	リテン サラネブ			
3	蕨 (編製物入)	296	ガマ サラネブ			
3	蕨 (編製物入)	297	サラネブ			
3	蕨 (編製物入)	298	サラネブ			
33	胴乱	299	イタタニ	石狩千歳		
99	蓆 (1)	300	キナ	石狩厚別		
99	蓆 (1)	301	キナ	沙流		
99	蓆 (1)	302	キナ	厚別		
38	枕	303	セニヌイベ	千歳		9866
103	簾	304	シユツラン			
100	製筵具	305	エテセカ	千歳		107
99	蓆 (1)	306	イナキス	沙流		
99	蓆 (1)	307	ニカウンベ	沙流		
99	蓆 (1)	308	ニカウンベ	厚別		
99	蓆 (1)	309		石狩		
99	蓆 (1)	310		沙流		
99	蓆 (1)	311	ヤイセンキナシユツブ	沙流		
99	蓆 (1)	312		沙流		
5	弓	313	グウチ	砂流	採集地記載ママ	
135	矢 2	314	ベウレブアイ	沙流		

カード No.	カード名	記載 番号	品名	収集地	備考	照合
135	矢 2	315	アイ	沙流		
135	矢 2	316	アイ	沙流		
134	矢筒	317	イカユ	千歳		9642
135	矢 2	318	アイ	千歳		
42	帯刀	319	エムシ	沙流		
41	刀ノ帯取	320		沙流		9645
39	柄杓	321		千歳	酒汲用	
85	木製片口	322	エトムツブ	沙流		
85	木製片口	323	エトムツブ	沙流		
95	盆	324	ヅウキ	千歳		
64	盃台	325	タカイサラ	千歳		
17	髭揚簪	326	エクパシー	千歳		10156
71	柄杓	327	カツクミ	色丹		
91	木鉢	328	サケニショツブ	沙流	酒入	
105	行器	329	ケモンベ	日高新冠		
105	行器	330	ハッチ	日高新冠		
133	熊掛ケ縄	331	モレリ	千歳		
35	キナ袋	332	カリンキキナ	沙流		32985
66	耳輪 熊二用ユ	333	マラトニンカリ	沙流	熊耳二附装飾トス	
102	帽子 シヤバアンベ 2	334	シヤバアンヘ	沙流		
42	帯刀	336	エムシ	沙流		10675
1	緯糸	339	アフンカ	沙流		
109	首飾 (リクトンベ)	339	リクトンベ	礼文香深		
36	犬橐索皮	340		樺太		
109	首飾 (リクトンベ)	340	リクトンベ		小児用	
52	獨木舟模型	341		静内		
48	船模型	342	モチツブ			
48	船模型	343	モチツブ			32537
47	犬橐模型	344	クヲレ	樺太		125
118	蕨ノ杖	345		沙流		33827* ¹²
99	葎 (1)	346		石狩		
99	葎 (1)	347		沙流		
99	葎 (1)	348		沙流		
99	葎 (1)	349		沙流		
99	葎 (1)	350		沙流		
99	葎 (1)	351		沙流		
98	葎 ■ (莞蘭葎) (2)	352	キナ	千歳		
98	葎 ■ (莞蘭葎) (2)	353		千歳		
98	葎 ■ (莞蘭葎) (2)	354		千歳		
98	葎 ■ (莞蘭葎) (2)	355		千歳		
98	葎 ■ (莞蘭葎) (2)	356		千歳		
98	葎 ■ (莞蘭葎) (2)	357		千歳		
98	葎 ■ (莞蘭葎) (2)	358	キナ			
98	葎 ■ (莞蘭葎) (2)	359	キナ			
44	裨衣 女子用	360				
44	裨衣 女子用	361				
5	弓	362	弓 大	樺太		9713

カード No.	カード名	記載 番号	品名	収集地	備考	照合
5	弓	363	弓 小			
134	矢筒	364	イカユ			
1	緯糸	365	アフンカ			
116	機具 榎	366	アフンカ			
5	弓	368	クワレク			
62	機具	369				10494
4	墓標	370		上川		
17	髭揚簪	371	エクパシー	沙流		
29	厚子切レ地	372	アツト	沙流		
142	■■ベ			日高沙流		

カード No. は、便宜的に付与したものであるが、同じ番号であれば同一のカードに記載されている資料であることを示す。品名については、記載のままにしてあるが、判読しがたい部分もあり誤読の可能性もある。利用にあたっては留意されたい。

照合欄の番号は、現行の資料番号である。

(注)

- *1: 資料付属ラベルに「1879 年、樺太」とあるが、北海道アイヌの様式であるため、資料管理台帳ではデータ記載がない。
- *2: 資料管理台帳では、収集地を「石狩厚別」とする。
- *3: 資料管理台帳では、収集地を「日高新冠」とする。
- *4: 資料管理台帳では収集日を「昭和 12 年」とするが、おそらく「明治 12 年」の誤り。
- *5: 資料付属ラベルには「1890 年 12 月 8 日、上川産」とある。
- *6: 資料付属ラベルの番号は「377」としたものを 150 に修正してある。
- *7: 資料付属ラベルの番号は「378」としたものを 151 に修正してある。
- *8: 資料付属ラベルの番号は、何らかの数字を抹消し、160 に修正してある。
- *9: 資料管理台帳に収集地情報あり。
- *10: 資料管理台帳では、収集地を「沙流」とする。
- *11: 資料付属ラベルに、「沙流」と「石狩」の二通りの記載がある。
- *12: 写真 5 ラベル裏の記載に基づく。

表8 写真7・8 ラベルが付属する資料（整理カードと照合できないもの）

資料番号	資料名	収集日	ラベル	記載情報	備考
148	片口		8		
156	神祈酒杯	1883.	8		
161	柄杓		8		
184	木皮燭	1879.	8		
195	柄杓		8	376	* ¹
9622	刑杖		8		
9624	刑杖	1879.	8		
9625	刑杖	1879.	8		
9659	刀		8		
10179	ヌサ	1882.10.	7・8	335.19 335.22	* ²
10180	ヌサ	1882.	7		
10181	イナウ		7		
10478	木椀	1879.	7.8		
10597	筋子つぶし器	1885.	8		
10604	盆		8		
10610	まないた	1887.	8		
10679	刀の鐔		7		
10688	弓		8		
10695	槍の柄	1882.	8		
10763	イナウ	1906.	8	カラフト 381	
10800	イナウ		8	カラフト 382	
10801	イナウ		8	■ フト ■	
10866	イナウ	1906.07.25	8	カラフト 380	
10912	筋子つぶし		8	373	* ¹
10917	火箸		8		
10943	織具		8	カラフト 375	
11050	刀		8		
13116	熊檻	1879.	7・8		
17656	奉酒箸		7		* ³
32589	矢		8		
32601	火揉台		8		
33004	倉庫	1879.	7・8		
33005	住居骨組	1879.	8		
33007	柄杓		8	379	* ¹

（注）

*1: 表7でも確認できるように、370番台の番号は写真7ラベルで150-160番台の番号に修正されており、これも修正される番号であろう。

*2: 「335」の番号を持つカードは現存しない。ラベルはヌサを構成する個別のイナウに付属するが、後に再構成された際に、新たに付け加えられたと推測されるものには付属していない。

*3: 資料管理台帳によれば、この資料の収集地は「厚真」である。厚真収集資料は、1910年代初頭に集中しており、これも同時期のものであるとすれば、写真7ラベルが何らかの理由で再利用されたか、別の資料のラベルが誤って付与されたと考えられる。

表9 カードによる整理以降の類別番号を持つ資料

『採集日記』記載				資料付属 番号	現在の管理情報			
受入日	品名	収集地	類別 番号		資料番号	資料名	収集地	収集日
40.3.27	鋸ノ柄	樺太	373	375	10943	織具	樺太	
40.3.27	切れ地	〃	374					
40.3.27	機織具	〃	375					
40.3.27	梭	〃	376					
40.3.27	篋	〃	377	377	10562	織具	樺太	
40.3.27	糸巻	〃	378					
40.3.27	蓆	〃	379					
40.3.27	エナウ	〃	380	380	10866 10865	イナウ	樺太西海岸海馬島 日ノ出浦コタン 三宅勉収集	1906.7.25
40.3.27	エナウ	〃	381	381	10763		樺太西海岸ウシヨロ 宮城鉄夫収集	1906.
40.3.27	エナウ	〃	382	382	10800	イナウ	樺太西海岸 三宅収集	
				386	11245	アイヌ冠	沙流	1914.3.
				391	10113	奉酒箸	沙流郡	1914.3.
				392	9569	奉酒箸	沙流	1914.3.
				393	9514	奉酒箸	沙流	1914.3.
				394	9515	奉酒箸	沙流	1914.3.
				395	17791	奉酒箸	日高沙流	1914.3.
				396	10159	奉酒箸	沙流	1914.3.
				404	9651	首飾	沙流	1914.3.

資料付属番号は、381 までは写真 8 のラベルに、386 以降は写真 5 ラベルの裏にある。ただし、【10865】は、資料に直接「380.2」の書き込みがある。

表10 『札幌博物館案内』掲載アイヌ民族資料

分類・品名		番号	品名	収集地	照合備考
家屋 其他建物	家屋	1号	家屋雛形	日高国沙流郡	
		2号	家屋組立雛形	石狩国石狩郡	
		3号	家屋組立雛形	樺太	
	倉庫	4号		日高国沙流郡	110
		5号		樺太	33004
	熊欄	6号	熊欄雛形	日高国沙流郡	13116
	鳥籠	7号		胆振国千歳郡	
衣服 及 附属品	アツシ衣	1号	ヲシケアツシ	日高国沙流郡	
		2号	ヲシケアツシ	樺太	
		3号	ヲシケアツシ	樺太	
	木綿縫取衣	5号	カアバラシ	日高国沙流郡厚別村	
		6号	カバシリ	胆振国千歳郡	
	鳥皮衣	7号	チカプウル	千島国色丹島	
		8号	チカプウル	千島国色丹島	81
	アツシ帯	9号		石狩国石狩郡	
		10号		日高国沙流郡	
		11号		日高国沙流郡	
		12号		樺太	91
	婦人帯	13号	シウエンテプヘチリンクト	樺太	
		14号	タントクト	樺太	
	礼帽	15号		石狩国石狩郡	
	帽子及頭巾	16号	帽子(コンチ)	樺太	
		17号	帽子(コンチ)	樺太	9466
		18号	帽子(コンチ)	樺太	
		19号	鉢巻(トタンブシ)	日高国沙流郡厚別村	
		20号	鉢巻(マタンブシ)	石狩国石狩郡	9473* ¹
	笠	21号		樺太	
	手袋	22号	ヲクンベ(ママ)	胆振国千歳郡	
	前垂	23号	アシボンハケ	日高国沙流郡	
	脚絆	24号	ホシ	胆振国千歳郡	
		25号	ホシ	石狩国石狩郡	
		26号	ケツブカツブホシ	樺太	
	靴及足袋	27号	海鱈皮(トンドケリ)	千島国色丹島	
		28号	鮭皮及海鱈皮(ケリ)	樺太	9458
		29号	葡萄蔓(シツケリ)	石狩国石狩郡	
	靴足袋	30号	ケリオツブ	石狩国石狩郡	
	カンジキ	31号	テシマ	樺太	
	太刀		エムシ		
	耳輪	32号	チウトンウンニンカリ	日高国沙流郡	
	首飾	33号		日高国沙流郡	
		34号	小児用		
		35号		北見国礼文郡香深村	
	腕輪	36号		日高国沙流郡	
日用器具 及 楽器	木皮鍋及 自在鍵	1号	木皮鍋(チクニカツブニハトシュ)	胆振国千歳郡	10589* ²
		2号	木皮鍋(チクニカツブニハトシュ)	胆振国千歳郡	
		3号	木皮鍋(チクニカツブニハトシュ)	樺太	196
		4号	自在鍵(シユブラ)	胆振国千歳郡	
	椀	5号	イタンギ	石狩国上川郡	
		6号	イタンギ	樺太	
		7号	貝殻形(ニセウ)	釧路国厚岸町	
	盆鉢及俎	8号	木盆(ニマ)	日高国沙流郡	33003* ²
		9号	木盆(ニマ)	日高国沙流郡	
		10号		釧路国厚岸郡厚岸町	
		11号		胆振国千歳郡	10609

日用器具及楽器	盆鉢及俎	12号		日高国沙流郡	10600
		13号	木皮盆(チクニカツプニマ)	胆振国千歳郡	
		14号	木皮盆(フニス)	石狩国石狩郡	
		15号	片口形	日高国沙流郡	10607
		16号	片口形	日高国沙流郡	
		17号	片口形	日高国沙流郡	
		18号	片口形(エトノツプ)	日高国沙流郡	
		19号	俎(チボンニマ)	釧路国厚岸郡厚岸町	10610
		20号	摺(チボンニマ)	釧路国白糠郡白糠村	
		21号	木盆(ヲチケ)	日高国沙流郡	10593
		22号	木盆(ヲチケ)	日高国様似郡	
		23号	木盆(ヲチケ)	日高国様似郡	
		24号	草盆(チユヲチケ)	石狩国石狩郡	
		25号	木鉢(ニパツチ)	日高国沙流郡	
		26号	木鉢(ニパツチ)	日高国沙流郡	
		27号	俎(シユケーニマ)	日高国沙流郡	
		28号	切り台(イタタニ)	胆振国千歳郡	
	杓子類	29号	シユトベラ	石狩国石狩郡	10487* ³
		39号	杓子(カシユツプ)	石狩国石狩郡	番号ママ
		31号	飯杓子(シタベラ)	千島	
		32号	杓子(カシユツプ)	日高国沙流郡	10483
		33号	杓子	石狩国石狩郡	
		34号	柄杓	千島国色丹島	
		35号	柄杓	千島国色丹島	
		36号	木皮製柄杓		
		37号	酒柄杓	胆振国千歳郡	10472
		38号	酒柄杓	日高国沙流郡	
		39号	ホウケンペラ	日高国沙流郡	
	喰匙及箸	40号	ホウケンペラ	日高国沙流郡	
		41号	ホウケンペラ	日高国沙流郡	
		42号	ホウケンペラ	日高国沙流郡	
		43号	ホウケンペラ	日高国沙流郡	
		44号	ホウケンペラ	日高国沙流郡	
		45号	ホウケンペラ	日高国沙流郡	
		46号	ホウケンペラ	日高国沙流郡	
		47号		石狩国札幌郡雁木	
		48号	骨製箸(カムイポネハシ)		
	髭篋	49号	イクバシユ	石狩国石狩郡	
		50号	イクバシユ	石狩国上川郡	
		51号	イクバシユ	胆振国千歳郡	
		52号	イクバシユ	日高国	
	白及杵雛形	51号	白(ニシヨウ)	石狩国石狩郡	10616* ²
		52号	白(ニシヨウ)	石狩国石狩郡	
		53号	杵(ユタニ)		10615* ²
		54号	杵(ユタニ)		
	箕及箒	55号	箕(ムイ)	石狩国石狩郡	
		56号	箕雛形(ムイ)		10605
		57号	箒(ソヌイブ)		
	枕	58号	チヌイベ		
	背負縄	59号	シナ皮製(チレップナヲンケツプ)	石狩国石狩郡	
		60号	シナ皮製	胆振国千歳郡	
		61号	海鱈皮製(ヌマラシタラ)	千島国色丹島	
		62号	海鱈皮製(ヌマラシタラ)	樺太	
		63号	糸縄	胆振国千歳郡	
		64号	糸縄	胆振国千歳郡	
	小児釣床及小児負具	65号	釣床(シンタ)	日高国沙流郡	
		66号	負本(アイアイヲウンベ)	石狩国石狩郡	資料名ママ
		67号	負縄(エオマチラルベ)	石狩国石狩郡	

日用器具及樂器	発火用具及灰搔	68号	火揉棒(ニイカラキシヤ)	石狩国石狩郡	
		69号	火打道具(バシラツプピウチ)	石狩国石狩郡	
		70号	ホクチ入(カアラバス)	胆振国千歳郡	
		71号	ピウチオツプ	石狩国上川郡	
		72号	ピウチオツプ	石狩国石狩郡	
		73号	ピウチオツプ	天塩国天塩	
		74号	灰搔(アベサンカラキライ)	石狩国石狩郡	
	燈火用具	75号	木皮蠟燭(チノエダ)	胆振国千歳郡	10545
		76号	木皮蠟燭(チノエダ)	胆振国千歳郡	
		77号	台木(シネユニ)	胆振国千歳郡	
	烟草用具	78号	烟草入(タンパコヲツプ)	日高国沙流郡	
		79号	烟草入(タンパコヲツプ)	樺太	
		80号	木製煙管(セレンボ)	樺太	
		81号	木製煙管(セレンボ)	樺太	
		82号	木製煙管(セレンボ)	釧路国厚岸郡	
	物干竿	83号	ヤルベシヤンケブ	日高国沙流郡	
	穂摘具	84号	エチヤヤビバ	石狩国石狩郡	資料名ママ
	容器雑種	85号	草製(キナバツパ)	日高国沙流郡	
		86号	樺皮製	樺太	
		87号	三徳	千島国択捉	
		88号	編製物入	千島	
	胴乱	89号	カロンプ	日高国新冠郡	
		90号	キナカロンプ	胆振国千歳郡	
		91号		釧路国厚岸郡	
	サラネツプ	92号			
		93号	草製		
		94号	草製		
	蓆及簾	95号	イヲマチタラベ	胆振国千歳郡	
		96号	キナ	日高国厚別	
		97号	キナ	日高国沙流郡	
		98号	キナ	樺太	
		99号	簾(シニツテン)	胆振国千歳郡	
	小刀	100号	マキリ	日高国沙流郡	
		101号	マキリ	日高国沙流郡	
		102号	マキリ	日高国沙流郡	
		103号	マキリ	石狩国石狩郡	18342*2
		104号	マキリ	石狩国石狩郡	
		105号	マキリ	石狩国上川郡	
		106号	マキリ	樺太	
		107号	マキリ	樺太	
		108号	小刀鞘(マキリシリカ)	日高国沙流郡	
		109号	小刀鞘	石狩国石狩郡	
		110号	櫛(ケヲレ)	樺太	
	樂器	110号	三弦琴(ハラリヤー)	千島国色丹島	
		111号	三弦琴(ハラリヤー)	千島国色丹島	
		112号	琵琶(ムツクリ)		
漁獵具及武具	たしろ	1号	タシロ	日高国沙流郡	
		2号	タシロ	日高国沙流郡	
		3号	タシロ	日高国沙流郡	
		4号	タシロ	石狩国石狩郡	
		5号	タシロ	石狩国石狩郡	
	刑杖	6号	シユト	胆振国有珠郡	
		7号	シユト	胆振国有珠郡	
		8号	シユト	胆振国有珠郡	
		9号	シユト	胆振国有珠郡	
	弓矢及矢筒	10号	弓(クー)		
		11号	弓(クー)		
		12号	弓(クー)		

漁獵具及武具	弓矢及矢筒	13号	弓(クー)		
		14号	弓(クー)		
		15号	弓(クー)		
		16号	仕掛(弓)(クアレク)	日高国沙流郡	
		17号	実地に仕掛けたる有様		
		18号	実地に仕掛けたる有様		
		19号	矢(アイ)	日高国沙流郡	
		20号	矢(アイ)	日高国沙流郡	
		21号	矢(アイ)	日高国沙流郡	
		22号	矢(アイ)	日高国沙流郡	
		23号	矢(アイ)	日高国沙流郡	
		24号	矢(アイ)	日高国沙流郡	
		25号	矢(アイ)	日高国沙流郡	
		26号	矢筒(イカヨ)		
		27号	矢筒(イカヨ)		
		28号	矢筒(イカヨ)		
		29号	矢筒(イカヨ)		
		30号	矢筒(イカヨ)		
		31号	矢筒(イカヨ)		
		32号	矢筒(イカヨ)		
		33号	矢筒(イカヨ)		
		34号	矢筒雛形(ボンイカエツプ)		
		35号	矢筒雛形(ボンイカエツプ)		
	銚類	36号	銚(ラスマ)	樺太	
		37号	銚(ラスマ)	樺太	
		38号	銚(ラスマ)	樺太	
		39号	銚		
		40号	銚鉦		
		41号	銚鉦		
		42号	鉦雛形		
		43号	鉦雛形		
		44号	鉦雛形		
		45号	鉦雛形		
		46号	モリ又ハナレ		
	捕鮭器	47号	マアレ	樺太	
		48号	マアレ	樺太	
		49号	マアレ	樺太	
	釣具	50号	魚を釣る針		
		51号	魚を釣る針		
	捕鳥具	52号	鷺釣(カバチリアツプ)		
	鹿呼笛	53号		胆振国千歳郡	
	船雛形	54号	丸木船		
		55号	丸木船		
		56号	丸木船		
		57号	丸木船		
		58号	矧船		
		59号	矧船		
		60号	矧船		
		71号	木皮船	胆振国千歳郡	
		72号	アカ波	石狩国石狩郡	
		73号	銚	樺太	
		74号	銚の柄	樺太	

工芸具及工芸品	首飾鑄形	1号	リクトンベシュ	日高国沙流郡	
		2号	リクトンベシュ	日高国沙流郡	
	糸巻	3号	ケムヲツプ	石狩国上川郡	
		4号	ケムヲツプ	日高国沙流郡	
		5号	ケムヲツプ	日高国沙流郡	
		6号		日高国沙流郡	
		7号		日高国沙流郡	
	蓆織具	8号	エテセカ	胆振国千歳郡	
	機織具	9号	機織具一揃		
		10号	厚子織具一組(カオルンベ)	日高国沙流郡	
		11号	帯織具(アツスクツチ)		
		12号	イシトモフ	日高国沙流郡	
		13号	緯糸(アフンカウニ)		
		14号	篋(アツシカルベ)	石狩国石狩郡	
		15号	篋	樺太	
		16号	帯織用篋(クウペラ)	日高国沙流郡	
		17号	帯織用篋(クウペラ)	日高国沙流郡	
		17号	梭(アフンカウニ)	樺太	
		18号	梭(アフンカウニ)	樺太	
		19号	綾取具(ヘカウニ)	日高国沙流郡	
		20号	箒(オサ)	日高国沙流郡	
		21号	箒(オサ)	日高国沙流郡	
		22号	箒(オサ)	樺太	
		23号	帯織用箒	胆振国勇払郡鶴川	
		24号	綾を分る物		
		25号	綾を分る物	樺太	
		26号	綾を分る物帯織用	日高国沙流郡	
		27号	糸を掛るもの(カニチ)	胆振国千歳郡	
	織物	28号	アツシ		
		29号	アツシ		109
		30号	アツシ		
		31号	アツシの切れ及其材料たる繊維	樺太	
	編物	32号	帽子(サバウンベ)	千島	
		33号	カバン用の用をなすもの(デンキ)		
	彫刻物	34号	手拭掛	日高国日高郡	10499
		35号	小刀の鞘、柄(マキリ)杉本目出平作	千島国択捉島内保	
宗教的用品	木幣	1号	木幣	石狩国石狩郡	
		2号	木幣	石狩国石狩郡	
		3号	木幣	石狩国石狩郡	
		4号	木幣	石狩国石狩郡	
		5号	木幣	樺太	
		6号	木幣	樺太	
		7号	木幣	樺太	
		8号	木幣	樺太	
		9号	木幣	樺太	
		10号	木幣	樺太	
		11号	木幣	樺太	
	葬具	12号	埋葬縄(ウトキアツ)	胆振国千歳郡	
		13号	墓標	石狩国上川郡	
		14号	背負縄(ボンタラ)	胆振国千歳郡	
	熊祭式場				

照合備考欄の番号は、現行の資料番号である。

(注)

*1: 表7で触れたように、収集情報に疑念がある。

*2: 資料に二つの番号が記載されたラベルが付属している。

*3: 資料に「沙流」という情報もある。

表 11 物品監守証書記載の購入・寄贈アイヌ民族資料

受領日	品目	数量	供給人	備考
1923.5.16	アマッポ	1	川瀬勝次郎	
1925.5.16	アイヌ機織機	1	川瀬勝次郎	
1925.5.16	ヘラ	4	川瀬勝次郎	
1932.6.23	ニマ(木製舟型ノ器)	1	伊藤喜代造	
1932.7.20	頸飾(考古学資料)	1	川瀬勝次郎	
1933.6.1	長襦袢(モウル)	1	川瀬勝次郎	
1933.6.1	臼	1	川瀬勝次郎	
1933.6.1	鮭皮衣(樺太アイヌ)	1	鈴木忠太郎	
1933.6.22	酒揚篋	2	伊藤喜代三	
1933.6.22	アイヌ丸木船	1	福元富太郎	
1933.9.19	熊捕 槍	1	伊藤喜代三	
1934.8.10	髭篋	3	篠岡秀	
1934.12.10	髭篋	28	篠岡秀	
1934.12.10	刀提緒	3	篠岡秀	
1934.12.10	飾太刀	2	篠岡秀	
1934.12.10	厚司	1	篠岡秀	
1935.5.18	アイヌ刀	1	川瀬勝次郎	
1935.5.18	アイヌ礼帽	1	川瀬勝次郎	
1935.5.18	アイヌ褌(大小)	5	川瀬勝次郎	
1935.5.18	アイヌ錦座	1	川瀬勝次郎	
1935.5.18	アイヌ飾刀	2	川瀬勝次郎	
1935.5.18	アイヌ褌(大小)	4	川瀬勝次郎	
1935.6.27	漆器椀(メノコ用漆器椀)	1	森次光治	
1935.8.28	ヒゲベラ	2	山川万次郎	
1935.8.28	ヒゲベラ	2	山川万次郎	
1935.8.28	ヒゲベラ	9	山川万次郎	
1935.8.28	幣	3	山川万次郎	
1935.8.28	幣	4	山川万次郎	
1935.8.28	幣	19	山川万次郎	
1935.8.28	矢	17	山川万次郎	
1935.8.28	矢	18	山川万次郎	
1935.8.28	矢	16	山川万次郎	
1935.8.28	弓	1	山川万次郎	
1935.8.28	矢	75	山川万次郎	
1935.8.31	花矢	21	山川万次郎	
1935.8.31	キケウシバスイ	2	山川万次郎	
1935.8.31	イナウ	5	山川万次郎	
1935.11.8	厚司	1	川上忠夫	
1935.12.3	イナウ	9	馬場脩	寄付
1935.12.3	イクバスイ	1	馬場脩	寄付
1935.12.3	矢	1	馬場脩	寄付
1936.1.21	キケウシバスイ	1	中村要吉	
1936.1.21	イクバスイ	1	中村要吉	
1936.1.21	イナオ	7	中村要吉	
1936.1.21	酒盃(台付)	1	中村要吉	
1936.1.21	花矢	12	平村重太	
1936.9.29	アイヌ首飾	1	清水雄平	寄付
1936.10.27	アイヌの盆(彫刻アル盆) 大: 経1尺 小: 経4寸	2	篠岡秀	

1936.10.27	ニナワ1本 キナ2枚 ムツクル5個 アツシ1反 矢7本 ワラヂ1足 ケリ1足 チノタツク3個 マタンベシ2個 矢入1個	24	清水雄平	
1936.11.25	礼帽	1	伊藤喜代三	
1936.11.25	鉢	1	伊藤喜代三	
1936.11.25	亀ノ頭	1	伊藤喜代三	
1936.11.25	白と杵	1	伊藤喜代三	
1936.11.25	木鉢 大中小	3	伊藤喜代三	
1936.11.28	矢	5	遠藤武雄	
1936.11.28	弓	1	遠藤武雄	
1936.11.28	飾刀	1	遠藤武雄	
1936.11.28	簾	2	遠藤武雄	
1936.11.28	飾刀	1	遠藤武雄	
1936.11.28	飾刀	1	遠藤武雄	
1936.11.28	イナウ	10	山下三五郎	
1936.11.28	アイヌ縫取衣	3	山下三五郎	
1936.11.28	アイヌ人形	1	山下三五郎	
1936.12.4	鉾先(キテ)2 髯篋(パスイ)2	4	伊藤喜代三	
1936.12.4	イナウ8 花矢10 キケウシパスイ3	21	山川万次郎	
1936.12.9	厚司	1	犬飼哲夫	寄付
1936.12.12	樺太アイヌノ鉄鉾	1	馬場脩	寄付
1937.3.19	イナウ	6	山川万次郎	
1937.3.19	鉾(キテ)	18	山川万次郎	
1937.3.19	花矢	10	山川万次郎	
1937.3.19	祭壇	2	山川万次郎	
1937.3.19	ヒゲベラ	50	山川万次郎	
1937.6.22	木製盆(ニマ)	2	佐藤富五郎	
1937.6.22	鉾 キテ別製	2	佐藤富五郎	
1937.6.22	サメ鉤 イシユカラアップ	1	佐藤富五郎	
1937.6.22	刀提帶 アムシアツ	1	佐藤富五郎	
1937.6.22	ヌササン(熊送りの祭壇)	1	佐藤富五郎	
1937.6.22	シトウ(樺太 スキー)	1	佐藤富五郎	
1937.6.22	シントコ 行器	1	佐藤富五郎	
1937.6.22	漆塗鉢 トコンコロベ	1	佐藤富五郎	
1937.6.22	アベオップ 石製火鉢	1	佐藤富五郎	
1937.6.22	ヒゲベラ イクパスイ	1	佐藤富五郎	
1937.6.22	飾古刀 タンネツ	1	佐藤富五郎	
1937.6.22	鉾先(キテ)	15	山川万次郎	
1937.6.22	鉾先(キテ)	3	山川万次郎	
1937.6.22	キケウシパスイ	2	山川万次郎	
1937.6.22	マレップ(魚鉤)	1	山川万次郎	
1937.6.22	鉾先(キテ)	3	山川万次郎	
1937.6.22	祭壇(ヌササン)	1	山川万次郎	
1937.6.22	古袖(コソデ)	1	山川万次郎	
1937.6.22	貂捕矢	1	山川万次郎	
1937.6.22	満州鉢(アイヌ鉢)	1	山川万次郎	
1937.6.22	イナウ	28	山川万次郎	
1937.6.22	イナウ	20	山川万次郎	

1937.6.22	彫刻狐	2	山川万次郎	
1937.6.22	ヒゲベラ	1	山川万次郎	
1937.6.22	ヤナ模型	1	山川万次郎	
1937.6.22	樹皮舟模型	1	山川万次郎	
1937.6.22	キケウシバスイ	3	山川万次郎	
1937.6.22	貂捕矢	1	山川万次郎	
1937.6.22	花矢	6	山川万次郎	
1937.6.22	花矢	21	山川万次郎	
1937.6.22	花矢 チロシ	12	山川万次郎	
1937.6.22	花矢	9	山川万次郎	
1937.6.22	花矢	2	山川万次郎	
1937.6.22	銚先 (キテ)	2	山川万次郎	
1937.6.22	銚先 (キテ)	20	山川万次郎	
1937.6.28	銚 (キテ)	4	佐藤富五郎	
1937.8.7	ミサキ銚	3	稲生典太郎	寄付
1937.8.27	アイヌ細工 (舟模型)	1	小野和平	
1937.8.27	花矢 6 キケウシバスイ 2 キテ 2	10	佐藤富五郎	
1937.9.24	銚柄	1	米村喜男衛	寄付
1937.10.2	耳輪 10 対 狩猟具 3	13	佐藤富五郎	
1937.10.2	銚 (キテ)	5	佐藤富五郎	
1938.5.3	アイヌ鬚篋	30	犬飼哲夫	寄付
1938.6.8	ヒゲベラ	3	佐藤富五郎	
1938.6.8	蒔絵柄杓	1	佐藤富五郎	
1938.6.18	ミサキ銚鉄製	1	稲生典太郎	寄付
1938.6.18	ミサキ銚木製	1	稲生典太郎	寄付
1938.6.18	ドウ 竹製	1	稲生典太郎	寄付
1938.6.18	シトンベカムイ	1	小倉範三郎	寄付
1938.6.18	イカルブツ 木製	1	小倉範三郎	寄付
1938.6.18	サバウンベ	1	司馬リキンテ (酋長)	寄付
1938.7.	アイヌ衣	1	佐藤富五郎	
1938.7.	アイヌ衣	1	福澤亀次郎	
1938.8.27	牡丹唐草蒔絵外居 1 蘭花紋蒔絵唐櫃 1 梅花并梨地蒔絵耳盥 1 唐草梨地蒔絵耳盥 1 松并蒔絵杯台 1 巴紋蒔絵高坏 1 螺鈿柄杓 1 西藏玉 2 木器 5	14	伊藤喜代三	
1938.10.5	亀の頭 (サバウンベ)	2	伊藤喜代三	
1938.10.6	衣服	3	佐藤富五郎	
1938.10.6	飾刀 1 礼帽 1	2	中村貴造	
1938.11.	花矢	15	佐藤富五郎	
1938.11.1	アイヌ衣 1 キテ 2 パスエ 1	4	伊藤喜代三	
1938.11.14	衣服	15	伊藤喜代三	
1938.	鮭送り祭壇	1	佐藤富五郎	
1939.1.20	祭壇	2	安達多仁治	
1939.3.	イナウ	5	佐藤富五郎	
1939.3.23	熊送祭壇	2	佐藤富五郎	
1939.3.23	チシボ	2	佐藤富五郎	

1939.3.23	キテ	2	佐藤富五郎
1939.8.2	ムリル細工	2	佐藤富五郎
1939.10.	アイヌ衣	3	佐藤富五郎
1939.10.	サバウンベ	1	佐藤富五郎
1939.11.	アイヌ衣 1 サバウンベ 1	2	川上サノウケ
1939.11.6	スオップ 1 ボロシントコ 2 シントコ 2 テクンコロベ 2 ツキ 16 タカイサラ 7 サバウンベ 1 エトヌップ 1 エムシ 11 タンネップ 1 アマッポアイ 1 セツバ 2 イナウ 25 アイオップ 2 オップアイ 5	47* ¹	松田武策
1939.12.	キケウシパスイ	1	佐藤富五郎
1939.	キテ 2 アフカニ 2	4	伊藤喜代三
1939.	鍋掛 2 筋子ツブシ 1 ユリカゴ 1 織物器 2	5	遠藤武雄
1939.	キケウシパスイ	38	佐藤富五郎
1940.2.	ケレケップ シリタツブ ヨクベ 農具	3	佐藤富五郎
1940.6.7	サバウンベ	1	伊藤喜代三
1940.6.7	農具	3	佐藤富五郎
1940.8.22	内耳鍋 火箸 火鉢	3	佐藤富五郎
1940.12.6	アイヌ衣	1	伊藤喜代三
1940.12.6	アイヌ飾太刀	1	佐藤富五郎
1940.12.6	木彫枕	1	福田忠之助
1941.12.11	アイヌ土俗品 (樺太アイヌ)	36* ²	佐藤富五郎
1941.12.11	イルノカ (樺太アイヌ)	6	佐藤富五郎
1941.12.11	イナウ (樺太アイヌ)	16	佐藤富五郎
1942.9.4	カラフト土人手袋	1	山野成之
1942.12.28	木彫鯨	1	伊藤喜代三
1943.2.8	アイヌ土俗品	48* ³	遠星梅太郎
1943.7.25	サバウンベ	1	伊藤喜代三
1943.7.25	ヒゲベラ	1	伊藤喜代三

品目は、「アイヌ土俗品」として、詳細は裏面に記載がある場合もあるが、適宜まとめている。

(注)

*1: 記載している資料の合計と、資料数が合致していない。

*2: 品目記載がないが、単位は「枚」である。

*3: 証書には「別紙内訳」とあるが、別紙を確認できない。